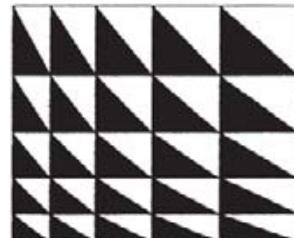


# モノグラフ・高校生'83

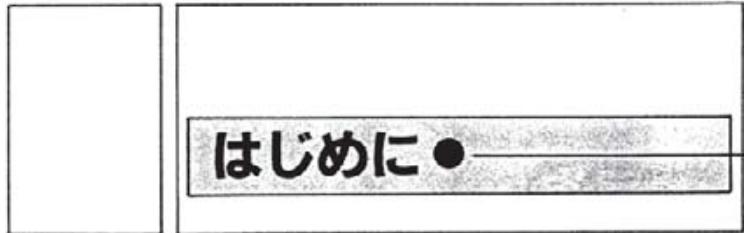
## vol.10 高校教師の教育観とライフサイクル

©1983(株)福武書店 教育研究所／加藤智穂・賀川雅子・遠藤純子  
放送大学教授 深谷昌志・武藏大学教授 武内清  
千葉大学助教授 明石要一・神奈川県立平安高校教諭 鶴坂明徳  
三井情報開発研究員 田中雅文



### 目次

はじめに	2	第V章 高校教師のライフスタイル	65
本報告書の要約	4	1 高校教師の生活時間	65
第I章 調査の意図とサンプルの特性	7	2 ファッションと職業意識	70
1 調査の意図と方法	7	3 職員室での話題	73
2 サンプルの特性	8	4 余暇生活	78
3 高校教師のキャリアパターン	10	5まとめ	82
第II章 高校教師の仕事は何か	15	第VI章 とまどい悩む高校教師たち	84
1 授業に熱心な教師	16	1 高校教師の退職願望	84
2 授業以外にも労を惜しまない教師たち	19	2 生徒についていけない悩みがトップ	87
3 わかりやすい授業を高く評価	22	3まとめ	92
4 高校教師って何?	26	第VII章 教師のタイプとライフサイクル	94
第III章 高校教師は生徒をどう見ているか	32	1 教師の4タイプ	95
1 教師の高校時代の過ごし方	33	2 教師のタイプの規定要因	99
2 教師と生徒の高校時代の違い	36	まとめに代えて	102
3 教師は生徒をどう見ているか	39	資料1 調査票見本	104
第IV章 高校教師は生徒をどう指導しているか	47	資料2 基礎集計表	117
1 教師の高校教育観	47		
2 相談相手としての教師	52		
3 進路選択とのかかわり	56		
4まとめ	64		



これまで小・中学校の教師を対象にした調査はかなりなされているが、高校教師を対象にした調査は少ない。高校教育の現状について、生徒に評価させることはあっても、多くの教師に意見を求めることはあまりない。この『モノグラフ高校生シリーズ』もvol. 9まですべて高校生（ないし大学生）を対象にして、高校教育問題をさまざまな側面でとりあげてきた。その中には高校教師に対する厳しい評価も含まれていた。

今回は、初めて高校教師の側に意見を求めて、高校教師の仕事観、生徒観、進路指導観、ライフスタイル、教職観を分析してみた。

高校教師は、それぞれ高い専門性と、人間味豊かな個性を持ち、このような統計的処理では捉えきれない側面も多く持っている。しかし、教師の年齢、教科、学校格差による教育観、ライフスタイルの差違もはっきり見られ、高校教師の社会的性格を量的に分析することも、一定の意義があるという確信が得られた。

高校教師はどうあるべきかというところまでの考察は行き届かなかつたが、高校教師がどのような教育観を持ち、どのように生徒に接しているのか、またどのようなライフスタイルの持ち主であるかが、ある程度明らかにできたと思う。

今回の調査の分析は4名の協同によるものであるが、深谷昌志放送大学教授には終始暖かいご指導を、また同人の4名の高校の先生方（石崎廣義、尾澤弘恒、浦生真紗雄、仁平正男の各先生）から現場の実情について多くのご示唆をいただいた。

調査の実施と刊行にあたって、福武書店の全面的なご協力を得た。福武書店教育研究所の加藤智彦所長、賀川雅子氏、遠藤純子氏に深く感謝したい。最後になったが、お忙しい中、調査にご協力いただいた高校の先生方に心からお礼申しあげる。

昭和58年7月 武内 清  
明石要一  
穂坂明徳  
田中雅文

調査の企画

高校教育研究会

代表 深谷 昌志（放送大学教授）  
武内 清（武蔵大学教授）  
明石 要一（千葉大学助教授）  
石崎 廣義（私立城北高校教諭）  
仁平 正男（東京都立八王子東高校教諭）  
蒲生真紗雄（東京都立武蔵高校教諭）  
尾澤 弘恒（東京都立荻窪高校教諭）  
穂坂 明徳（神奈川県立平安高校教諭）  
田中 雅文（三井情報開発研究員）  
耳塚 寛明（東京大学助手）  
樋口大二郎（東京大学大学院）  
刈谷 剛彦（東京大学大学院）  
吉本 圭一（東京大学大学院）

本書の執筆分担

武内 清 I章、III章、VII章  
明石 要一 II章、VI章 まとめに代えて  
穂坂 明徳 V章  
田中 雅文 IV章

## 本報告書の要約

### 第Ⅰ章 調査の意図とサンプルの特性

①本調査は、高校教師の教育観や価値観のあり方が今後の高校教育の方向を決定すると考え、高校教師の教職観、授業観、生徒観、進路観、ライフスタイルを明らかにしようとしたものである。

②調査対象は全国の全日制普通科高校990校の教師9900名(1校あて10名)。郵送法により1843名(回収率18.6%)の回答を得た。

③調査時期は、昭和58年2月である。

④普通科高校以外の勤務経験者は6割強でその割合は若い層に少なくなっている。

⑤高校教師には、学校ランクの高い進学校へ異動するキャリアパターンが存在する。

⑥生活指導係には体育教師がつくことが多い。

### 第Ⅱ章 高校教師の仕事は何か

①高校教師の授業行動は、手作りの資料を使い、板書に気をくばり、ノートのとり方を指導し、宿題まで出しと、きめ細かく熱心である。

②授業は年齢が高いほどきめ細かくなり、35歳で一応の型ができる。

③教師たちは専門性を高める努力を怠らず、生徒指導の姿勢は厳しくはあるが、生徒思いで熱心である。

④若い教師は生徒との接触やクラブ指導に熱心で、年配の教師は専門領域に閉じこもり勝ちである。

⑤授業で勝負できない教師は、同僚から暖かい目でみられない。

⑥進学校では授業のわかりやすい教師よりも高度な専門性のある教師が同僚から高く評価され、非進学校では専門の知識よりも、授業のわかりやすさや生徒とよく接する教師が高く評価される。

⑦高校教師は高度な知識が必要なわりには、経済的・時間的にゆとりがなく、体力がいり精神的気苦労が多い。しかし生徒と接する喜びが唯一の救いと考えられている。年配の教

師ほど、高校教師には専門的知識が必要で、社会的に尊敬される職業として評価している。

⑧高校教師という仕事に大変な気苦労を感じているのは、非進学校に勤める20代及び30代の教師である。逆に気苦労をあまり感じていないのは、進学校に勤める40歳以上の教師で、早くから教職を志望していた者である。

### 第III章 高校教師は生徒をどう見ているか

①教師たちは、高校時代にクラブ活動に打ち込むことは少なかったが、勉強を中心とした生活を送り、通っている学校に高い誇りを持つ「優等生」だった。

②高校時代は勉強一筋のまじめ派の「英語」と「数学」の教師に対し、勉強よりはクラブに打ち込みクラスの仕事もすんで引き受けた「体育教師」とが対照をなす。

③自分たちの高校時代に比べ、今の高校生は勉強よりは、クラブ活動、異性とのつきあいといった人間関係や遊びに傾斜した生活を送っている、また反抗的であったり無気力な生徒が増加している、と教師たちは評価している。

④しかし、昔以上に大学進学をめざして必死に勉強している生徒も、一部の進学校にはいる。

⑤今の高校生には、「勉強型」「のびのび型」「逸脱型」の3つのタイプがある、と教師に状況規定されている。

⑥進学校には「勉強型」と「のびのび型」が、非進学校には「逸脱型」の生徒が多いとされる。

⑦教師は生徒を勉強という単一の価値基準で判断しがちである。異性との交際、おしゃべり、反抗、孤立、無気力が一括して逸脱とされる。

⑧年配の教師の方が生徒を余裕をもって複眼的に見ている。若い教師の方が生徒に対する評価が厳しく(反抗的、無気力的と決めつけている)、若い教師・生徒間には葛藤が存在する。

### 第IV章 高校教師は生徒をどう指導しているか

①学力別クラス編成、テスト結果の公表と

いった勉学重視の教育を求める教師と、文化祭、運動会、服装の自由化などのびのびとした自己表現のできる高校生活を望む生徒との対立が存在する。

②学校行事、創造性、自由を重んずる「人間解放型」の教師と、受験勉強、学力別クラス編成、競争意識の付与を重んずる「勉強推奨型」の2類型が存在する。

③前者は若い教師、文科系の教科、生活指導の教師に多く、後者は年齢の高い教師、理科系と英語、進路指導教師に多くみられる。

④生徒からの相談は勉強中心に限られ、教師は生活全般についてのカウンセラーの役割をはたしていない。

⑤身近で日常的な問題は若い教師へ、深くて大きな問題は経験豊富な年配教師へといった、相談内容による選択が生徒にみられる。

⑥高校教師の大学に関する知識は当面の受験対策に関するものに限られ、学生生活や大学卒業後の人生を見越した上での進路指導は困難になっている。

⑦非進学校では、大学についての知識が少なく、大学への期待が「せめて資格の一つでも」という消極的なものになっている。

### 第V章 高校教師のライフスタイル

①高校教師は私的生活領域においても、真摯でまじめな生活を送っている。

②教師の知的情報源は、テレビより読書である。

③30代の教師に教材研究の時間が少ない。

④20代の若い教師は同年代の同僚とつきあい、40代以降になると教科や学年との結びつきが強まる。

⑤教師という職業柄を意識して服装をととのえる教師は3分の2いる。職業柄を意識しない教師は30代や理数系教師が多い。

⑥男子教師のスタイルは、ネクタイとビジネスバッグに象徴される。20代教師はブレザー、年配教師はスーツという服装が一般的である。マイカーによる通勤も55%と多く、教師の生活スタイルはきわめてスマートになっ

ている。

⑦職員室での話題の中心は、生徒のことと教科のことの2つである。生徒のことはどの学校どの世代でもよく話題にされるが、教科のことは進学校においてまた年配の教師によってよく話題にされる。

⑧非進学校では、困難な勤務条件を反映して、職場の人間関係への話題が多い。

⑨教師の余暇活動は、「趣味的活動」「スポーツ」「音楽・美術・文学」が、ベスト3である。

## 第VI章 とまどい悩む高校教師たち

①教職志望は、高校時代に4割が持っていた。

②1度でも教師をやめたいと思ったことのある者は、6割を超える。

③教師を1度でもやめたいと思ったことのあるのは、教職志望の遅かった者、教育系以外の大学出身者、役職やクラブの顧問なし、教科では文科系教科に多くみられる。

④教師の最も大きな悩みは、「生徒の考え方や行動についていけない」である。

⑤その悩みを深刻に持つのは、非進学校に勤める45歳以上の教師で、とりたてて役職にもつかず、読書よりテレビ好きのタイプである。その悩みが深刻でないのは、早くから教職を志望した若い教師で、進学校に勤め、運動系クラブの顧問をし、読書量の多い者である。

## 第VII章 教師のタイプとライフサイクル

①教師の教育観を仕分ける軸として、第1に「人間志向」か「人間志向弱い」か。第2に教職に「自信・自負あり」か「自信・自負なし」かが働いている。

②上の2つの軸の交差によって、「モラトリアム教師」(人間志向・自信・自負なし)、「スランプ教師」(人間志向弱い・自信・自負なし)、「達観教師」(人間志向弱い・自信・自負あり)、「円熟教師」(人間志向・自信・自負あり)、の4つの教師タイプが描ける。

③個人のライフサイクルにそって、「モラトリアム教師」(20代・30代前半)→「スランプ教師」(30代後半)→「達観教師」(40代)→「円熟教師」(50代)という推移をたどる。

④進学校に勤めるか、非進学校に勤めるかで、教職に自信・自負が持てるか持てないかが決まってくる。高校格差の問題は、高校教師にとっても深刻である。

本報告は、高校教師の教育観とライフサイクルの実証的分析を意図した。実態の分析だけで、処方箋を書くまでに至らなかったが、それは別の機会に譲りたい。

# 第Ⅰ章 調査の意図とサンプルの特性



## 1. 調査の意図と方法

### (1)調査の意図

高校進学率は10年ほど前には90%を超え、6年前には93%に達し、このところこの水準で安定している。このモノグラフ高校生調査もこれまで生徒を対象にした調査を過去9回実施し、生徒の側からユニバーサル化した高校教育の内実を問題にしてきた。

今回は視点を変えて、高校教師の側から高校教育の内実に迫ってみた。高校教師の教育指導のあり方や教育観に、高校教育の成否がかかっていると考えたからである。

調査内容は、教師の生徒観、進路指導観、

授業観、教職観、高校教育観、悩み、職員室での話題、ファッショն、余暇生活、生活時間、経験にわたっている。

分析は、教師の年齢、教科、役職、勤務校の学校ランクを基本クロスとして展開した。

調査対象は、全日制普通科高校の教師に限定し、高校教師の中でも、エリートというべき層が対象となった。

### (2)調査の対象

調査対象は、次のようにして選んだ。  
福武書店とコンタクトのある全国の高校、  
1864校(「進研模試」の利用校のため、普通科

が中心。北海道から沖縄に及ぶ)から、東京117校については全数、その他の道府県については2分の1の抽出率で、合計990校に郵送で調査の依頼をした。

1校につき10名(校長・教頭、女子教師を含めること、いろいろな年齢層にわたるようなど、選定を依頼)にお願いした。

返信は、秘密を守るために無記名とし、個人

個人に返信用封筒に同封する形でお願いした。

その結果、1843名(有効サンプル)の回答を得た。

回収率は、方法が変則なので、正確には言えないが、19%となっている。

調査時期は、昭和58年2月1日より、2月28日である。

## 2. サンプルの特性

今回調査対象になった教師の基本的属性は以下の通りである。(総数1843名、数字はパーセント、不明は省略)

(1)性別

男子	女子
87.6	12.4

(2)年齢

25歳以下	26—30歳	31—34歳	35—39歳	40—44歳	45—49歳
4.5	13.4	13.1	14.4	18.3	15.2
50—59歳					60歳以上
20.3	0.8				

(3)教職の  
経験年数

3年以下	4—6年	7—9年	10—14年	15—19年	20—29年
7.8	9.0	10.6	13.1	18.9	31.1
30年以上					
9.6					

(4)担当教科

英語	国語	数学	社会	理科	芸術・家庭	体育	その他
20.8	19.6	19.0	17.1	14.5	3.8	3.1	2.1

(5)クラス担任

担任をしている	担任をしていない
53.0	47.0

(6)クラブ顧問

運動系	文化系	その他	なし
50.0	40.4	0.9	8.7

(7)役職 あるいは係	校長・教頭	教務	総務	教科	進路指導	生活指導
	2.9	12.0	3.2	5.6	41.6	12.8
	厚生・保健	学年	なし			
	3.0	13.5	5.4			
(8)現在の勤務校(設置別・創立年)	国公立・戦前	国公立・昭和24—50年	国公立・昭和51年以降			
	51.9	27.5	8.6			
	私立・戦前	私立・昭和24—50年	私立・昭和51年以降			
	6.8	4.5	0.7			
(9)勤務校の4年制大学進学希望率	30%以下	30—59%	60—79%	80—89%	90%以上	
	24.9	22.7	18.8	11.3	22.3	
(10)勤務校の共通一次受験率	2割以下	3割くらい	半数くらい	7割くらい	9割以上	
	45.5	20.6	12.0	14.6	7.3	
(11)勤務校は何校目か	1校目	2校目	3校目	4校目以上		
	20.0	25.4	24.7	29.9		
(12)経験のある学校(現在校除く複数回答)	創立が戦前(普通科)	創立が昭和24—50年(普通科)	創立が昭和51年以降(普通科)			
	42.2	29.8	2.8			
	職業高校	定時制高校	小・中学校			
	28.6	20.6	15.5			
(13)出身学校	教育系大学(国公私立)	教育系以外の大学(国公立)	教育系以外の大学(私立)			
	32.7	29.5	26.3			
	大学院	短期大学	師範学校	旧制の専門学校	旧制の大学(国公私立)	その他
	4.4	0.3	0.5	3.6	2.2	0.5

### 3. 高校教師のキャリアパターン

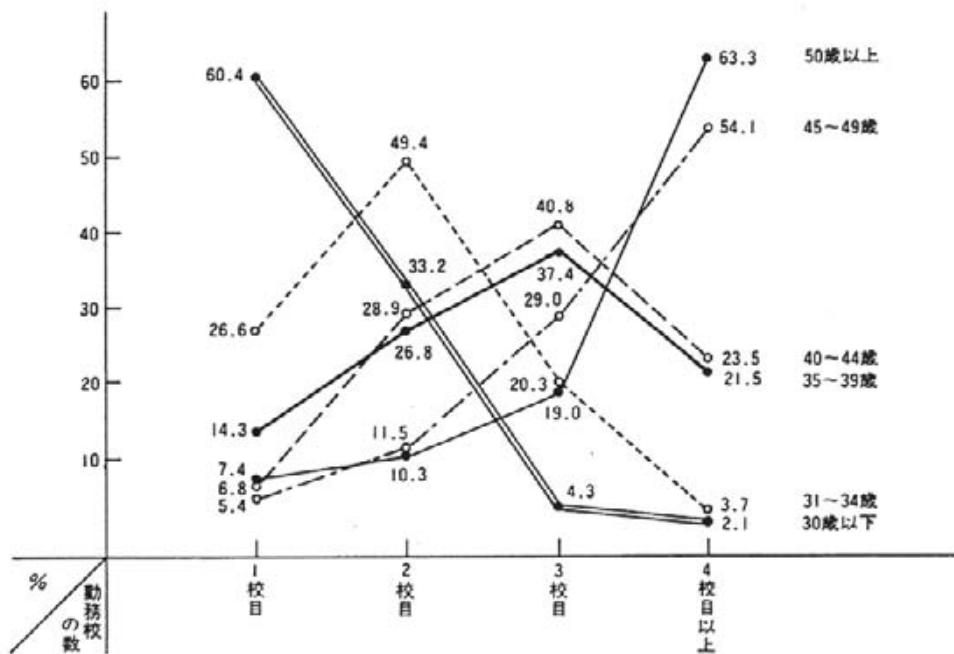
#### (1) 転勤

高校教師はその教師生活の中で、何處か勤務校をかわっている。現在の学校が何校目かを年齢別に見たのが図I-1である。30歳以下では1校目が6割とまだ多い。2校目の人も3割はいる。30代前半になると約半数が2校目を経験し、3校目の教師も2割いる。30代後半になると3校目というのがいちばん多くなり、4校目も2割はいる。40代になると4校目以上が主流となる。おおざっぱに見ると、20代に最初の勤務校へ赴き、30代前半に2校目、30代後半から40代前半に3校目、40代後半に4校目という勤務パターンが一般的なようである。

それでは、その転勤はどんな学校から、どんな学校へと行われるのであろうか。これまで経験した学校についてみると、小・中学校16%、定時制高校21%、職業高校29%となっている。複数回答なので、一人でいくつもの重複した経験を持つ者があるにせよ、かなり高い数字を示している。普通科高校の教師といっても普通科高校だけの純粹培養ではなくて、それ以外の体験も経てきている。表I-1に見るよう、年齢の高い教師ほど小・中学校、定時制や職業高校の経験が多くなっている。これら他の学校種での教育経験は、現在の普通科の生徒に対する指導にどのように役立っているのであろうか。

教科別に見ると、体育の教師は小・中学校の経験が少なく(11%)、定時制の経験が多

図I-1 勤務校の数×年齢



い(35%)。その他の点では、教科別の差違はほとんどない。

このような異動パターンによって、現在教師たちは、どのような高校に勤めるようになっているのだろうか。現在の勤務校を、設置別と学校創立年組み合わせで見たのが表I-2である。

今回のサンプルが比較的進学校に偏ったせいもあるって、戦前の創立の学校6割(公立=52%、私立=7%)、昭和24~50年創立の学校が3割(公立=28%、私立=4%)、昭和51年以降の学校が1割弱(公立=9%、私立=1%)と、新設校より伝統校が多くなっている。

これを教師の年齢別に見ると、40歳以上で、戦前創立の普通科高校に勤める率が約6割と高くなる。

共通一次受験者を指標にした学校ランクで見ると、共通一次受験者2割以下の「非進学校」には、20代の若い教師が多くなっている。年齢の上昇とともに、ランクの高い「進学校」へ転勤するパターンがあることがうかがえる。

このようにして、非進学校には若い教師が、そして、進学校にはベテラン教師が多く集まるという傾向があるにしても、その傾向は極端ではないことも指摘しておこう。たとえ学校ランクが低くても、役職づきで転勤する場合もかなりあるからである。

表I-1 勤務経験校×年齢 (複数回答)

(%)

年齢	勤務経験校				
		小・中学校	定時制高校	普通科高校 (創立 昭和51年以降)	普通科高校 (創立 昭和24~50年)
20歳以下	日本	15.5	20.6	2.8	29.8
20歳以下	30歳以下	3.3	6.7	3.6	11.2
20歳以下	△	△	△	△	14.6
21~30歳	日本	4.1	17.0	3.3	24.9
21~30歳	△	△	△	△	24.5
31~40歳	日本	9.8	24.5	1.5	35.1
31~40歳	△	△	△	△	38.1
41~50歳	日本	8.9	21.1	2.1	33.3
41~50歳	△	△	△	△	50.6
51~60歳	日本	29.4	32.3	1.4	31.9
51~60歳	△	△	△	△	61.6
60歳以上	日本	32.3	23.3	4.1	40.8
60歳以上	△	△	△	△	58.2

注) ○=最高値

表 I - 2 現在の勤務校×年齢

(%)

	設置・創立別			私立 普通科 高校	学校ランク別					
	国公立普通科高校				共通一次受験者の割合					
	創立 戦前	創立 昭和24 ~50年	創立 昭和51 年以降		2割 以下	3割 くらい	半数 くらい	7割 くらい	9割 以上	
全 体	51.9	27.5	8.6	12.0	45.5	20.6	12.0	14.6	7.3	
30歳以下	43.5	31.5	(10.5)	14.5	(58.0)	16.5	8.6	8.9	8.0	
31~34歳	43.1	30.4	(12.2)	14.3	(54.4)	18.0	11.3	12.1	4.2	
35~39歳	49.5	30.8	7.2	12.5	47.7	23.3	13.0	10.3	5.7	
40~44歳	(58.6)	23.4	9.3	8.7	38.2	23.2	12.5	(19.0)	7.1	
45~49歳	(55.6)	27.5	9.2	7.7	39.4	22.7	11.2	(19.5)	7.2	
50歳以上	(57.8)	24.0	4.4	13.8	38.4	19.7	15.0	16.8	(10.1)	

## (2)役職・係

高校は一つの組織である。さまざまな役職や係があり、教師たちがそれらの職務に忙殺されることも多い。

「係・役職は特にない」と答えたのは5%



にすぎず、残りの95%は、何らかの役職や係についている。

その内容を多い順に見ていくと、「進路指導」(42%)、「教務・総務・教科」(20%)、「生活指導・厚生・保健」(16%)、「学年」(14%)、「校長・教頭」(3%)となっている。

性別で見ると、女子教師は「教務・総務・教科」(女子33%>男子19%)と、「生活指導・厚生・保健」(女子22%>男子15%)に多く、その他ではいずれも少ない。

年齢別にみると、20代には「役職・係はない」(9%)と「教務・総務・教科」(28%)が多い。また50歳以上に「学年」(16%)と「校長・教頭」(13%)が多くなっている。しかし全体では特にきわだった傾向というのではない。役職や係は、ローテーションや話し合いで決められることが多いこともあると思われる。

表 I - 3 役職・係×担当教科 (%)

担当教科	役職・係	校長・教頭	教務	進路指導	生活指導 厚生・保健	学年	なし
英語		2.6	22.1	45.5	12.9	12.6	4.3
国語		1.5	(23.3)	39.4	(18.8)	10.7	6.3
数学		2.8	14.4	(48.1)	12.3	(16.0)	6.4
社会		(3.4)	23.1	38.0	15.5	14.8	5.2
理科		(4.4)	19.7	(47.4)	10.8	15.3	2.4
芸術・家庭		0.0	(32.2)	22.6	22.6	9.7	(12.9)
体育		0.0	7.8	9.8	(58.9)	(15.7)	(7.8)
全體		2.6	20.6	41.8	15.9	13.7	5.4

注) ○ 1位  
○ 2位

担当教科別に見ると、表 I - 3 のように、若干の傾向が見られる。英語は「進路指導」、国語は「教務」と「生活指導」、数学は「進路指導」と「学年」、社会は「校長・教頭」、理科は「進路指導」と「校長・教頭」、芸術・家庭は「教務」と「役職なし」、体育「生活指導」と「学年」の担当となる傾向があることがわかる。

特にきわだった傾向は、体育の教師が「生

活指導・厚生・保健」の係となる傾向(59%)である。生徒の規律、補導は体育教師にまかせる、という学校の体質があるようだ。

校長・教頭は、今回のサンプルでも53名で、3%いるが、その属性としては次のようなことがあげられる。

男子、年齢50歳以上、教職経験20年以上、勤務校4校目以上、主要5教科(理・社・数・英・国)の担当、師範学校卒である。

### (3) クラス担任

現在クラスを担任している教師は53%、していない教師は47%いる。

性別では、男子55%、女子45%の担任率である。

年齢別に見ると、図I-2のように、30代前半がピークとなる。教職年数では7~9年が担任率76%とピークになる。

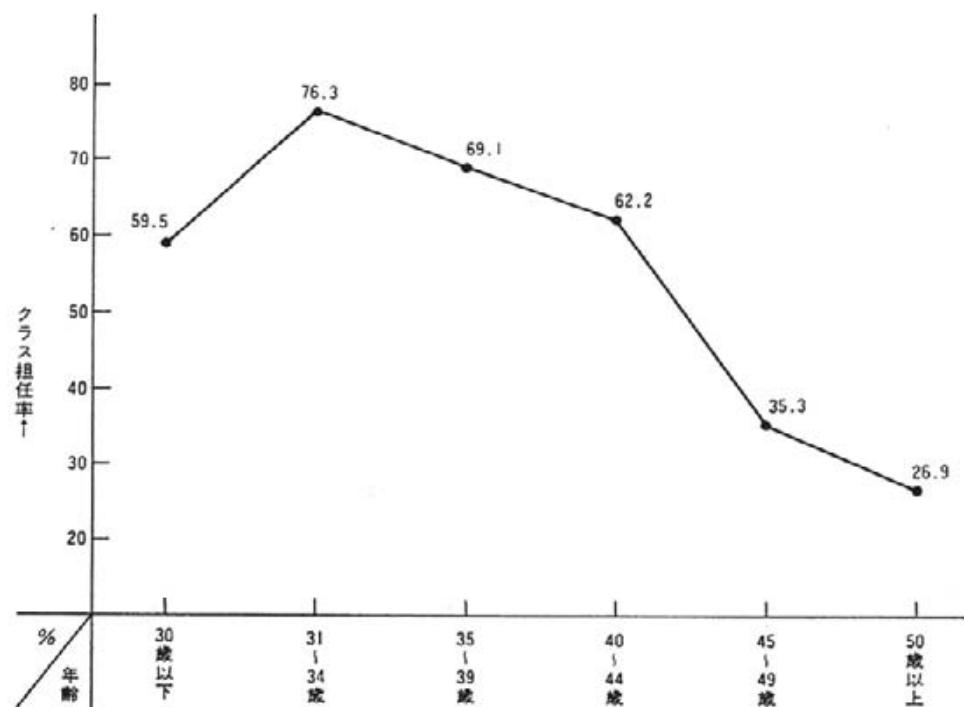
教科別ではクラス担任率の高い順に、数学(62%)、体育(60%)、理科(56%)、国語(54%)、社会(51%)、英語(48%)、

芸術・家庭(36%)となっている。

クラブ顧問との関係を見ると、クラス担任をしている教師は運動系のクラブ顧問をする率が高い(クラス担任59%、担任なし41%)。クラス担任をしていない教師は、文化系の顧問あるいは、クラブの顧問もしていないが多い。

役職との関係では、生徒と直接かかわりの深い役職(学年=78%、生活指導=51%、進路指導=51%)の教師が、クラス担任をしている。

図I-2 クラス担任率×年齢



## 第II章 高校教師の仕事は何か



昭和57年現在、小学校から短大・大学までの教師の総数は、約110万人にのぼる。そのうち高校の教師は24万4千人である（文部省『文部統計要覧』昭和57年度）。教師が5人集まれば、ほぼそのうち1人が高校教師ということになる。小学校教師が46万8千人で、約5人に2人というのには及ばないまでも、高校の教師数はかなりの割合を占めているのである。

また、高校進学率が94%を超える現在、生徒の親はいうまでもなく、ほとんどのおとながなんらかの形で高校教師とかかわり合いを持つようになっている。今や高校教師は身近に、具体的な人物を通して、イメージが描ける存在となっている。

ところが、具体的な人物としての教師は描けても、職業としての教師の姿はなかなか見

えてこない。換言すれば、高校の教師はどんな仕事をしているかがはっきりしていない。見えにくいのである。その背景の一つに、高校の教師が、教師として学校にある姿に接する機会が少ないことがある。小学校の授業参観に代表される、保護者が学校に足を運ぶような機会は、高校ではかなり数少なくなる。そのうえ教科担任制のため、全体像としての高校教師像を描きにくい面がある。さらに、従来の教師研究は小学校教師を対象としたものが主流となってきたこともあげられる。

本章ではそういう背景を超えて、高校教師が、日々学校でどのような活動をしているのか、またどんな教師を高く評価しているか、自分たちの職業をどんなものと見ているか、など、これまで見えにくかったところを明らかにしていく。

# 1. 授業に熱心な教師

## (1) 教科にみる授業行動

高校教師の仕事を具体的な項目であげればきりがないが、大きく分けると、教科指導と生徒指導の二つになる。そして從来は、教科指導が高校教師の主たる仕事と考えられていた。

それでは、現在の高校教師は教科指導の具体的な場である授業を、どのように行っているのであろうか。表II-1は、教師の授業行動を7項目あげ、それらにつき4段階スケールで評価してもらった結果である。

授業行動のようすをはっきりさせるために、「とても」と「かなり」を加えた数値に注目してみよう。最も多いのが「板書に気をくばっている」で、75%と5人のうち4人の割合

になる。小学校の授業研究の反省会では、きまって板書の仕方が問題としてとりあげられる。ややもすれば大学と同じような講義調になりやすい高校の授業で、これほど板書に気をくばっているとは意外である。

次に多いのが「手作りの資料を使う」(54%)、「宿題や課題を出す」(51%)、「ノートのとり方を指導する」(49%)などで、いずれも半数前後に達する。また50分の授業を「脱線して終わることもある」と答えた者はわずかに18%である。8割を超える教師が、きちんとまとめて授業を終えているようだ。

このように、高校の教師は授業において、かなりの者が、手作りの資料を使い、板書に気をくばって、ノートのとり方を指導し、さらに宿題までも出している。意外なほどにき

表II-1 授業行動

(%)

尺度 項目	して い る		して い ない	
	とて も	か な い	あ ま い	ま っ た く
板書に気をくばっている	18.1 74.8	56.7	23.4 25.2	1.8
ノートの取り方を指導する	13.2 53.5	40.3	40.8 46.5	5.7
宿題や課題を出す	8.4 50.7	42.3	42.9 49.3	6.4
手作りの資料を使う	7.1 49.0	41.9	44.7 51.0	6.3
脱線して終わることある	8.7 43.8	35.1	45.3 56.2	10.9
小説など読みながら教える	10.5 43.3	32.8	43.7 56.7	13.0
授業して授業が終わる	2.1 18.2	16.1	61.8 81.8	20.0

め細かくて熱心な授業行動がなされているのである。

ところで、こうしたきめ細かい熱心な授業行動には、担当する教科による違いはあるのだろうか。それを調べたものが表II-2である。表中の数値は「とても」と「かなり」を加えたものである。項目ごとに○は最高値、□が二番目に高いもの、—は最低値、—は二番目に低い数値を示している。

このしるしに注目しながら、各教科の相対的な授業行動の特徴をスケッチしてみよう。

英語……教科書に準拠した授業を行い、小テストが多く、宿題を出す。

国語……ノートのとり方の指導に力を入れる。

数学……手作りの資料はあまり使わないが板書に気をくばり、ノートのとり方に力を注ぐ。宿題を出したり、

小テストを行う。

社会……宿題は出さず、脱線して授業が終わることもあるが、手作りの資料を使う。

理科……板書に気をくばる。

芸術} ……板書やノートのとり方には関心があるが、教科書にはこだわらず、手作りの資料を使う。

体育……板書に気をくばらない、小テストはしない、宿題も出さない。そして脱線して授業を終わることもある。

こうしてみると、授業行動は、相対的ではあるにせよ各教科の特徴が出ている。教科担任制が重んじられ、教科の専門性が高い高校では、教科による授業行動の差異はある程度予想できたが、結果はそれを上回るものであった。

表II-2 授業行動×担当教科

教科 項目	英語	国語	数学	社会	理科	芸術・家庭	体育	(%)
板書に気をくばっている	66.9	71.6	83.3	77.6	81.8	60.3	55.5	
手作りの資料を用いた授業	44.5	58.4	41.0	61.4	60.6	70.6	54.6	
宿題や課題を出す	66.3	53.7	68.0	27.7	39.4	36.7	15.7	
ノートのとり方を指導する	47.7	60.2	52.4	39.1	48.1	30.9	33.4	
教科書にこだわらない授業をする	24.1	55.2	38.6	43.8	53.4	73.5	42.6	
小テストをたびたび出す	74.1	49.2	51.6	18.8	24.2	14.7	5.6	
脱線して授業が終わる	11.3	24.8	11.5	28.3	12.1	8.8	36.4	
注) とてもしている かなりしている あまりしていない まったくしていない								
%								
○ 1位      □ 2位      — 下より2位      — 下より1位								

## (2)年齢・性別にみる授業行動

次に授業行動を年齢別に見たものが表II-3である。表中の○は最も高い数値、—は最も低い数値を示す。

この表から二、三の興味深い事実が読みとれる。一つは、年齢が進むにつれて授業行動はきめ細かくなり、「50歳以上」がその頂点にある、ということである。例えば、「板書に気をくばる」がその代表である。数値を見ると67%（30歳以下）→67%（31~34歳）→70%（35~39歳）→77%（40~44歳）→80%（45~49歳）→84%（50歳以上）と、年齢とともに増加していく。

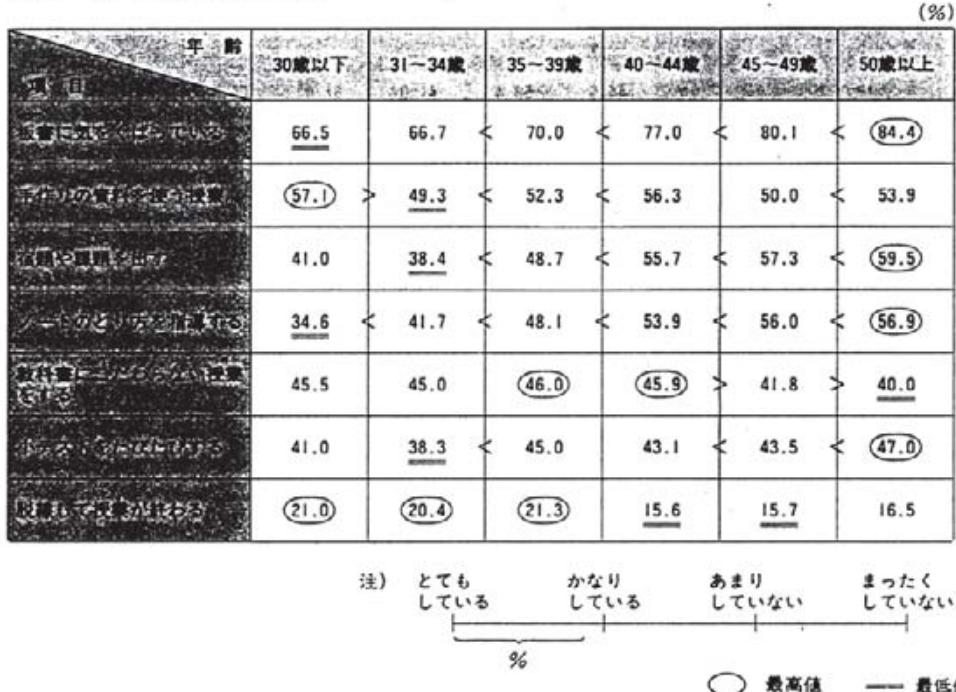
もう一つは、若い教師ほど授業がきめ細かくないといえるが、ほぼ34歳がそのターニング・ポイントになっている。ほとんどの職種が10年間のキャリアを持てばベテランと呼ばれるようになるのだが、高校教師の場合も、こと授業行動に見るかぎり、35歳以上から油がのり、円熟への道を歩み出すようである。

また、授業行動を性別に調べてみたものが図II-1である。実線が男子教師、破線が女子教師である。図からわかるように、女子の方が、授業にまじめで熱心である。板書への気のくばり方やノート指導ではほとんど差が見られない。ところが、「手作りの資料を使う」（女子63%>男子53%）や、「宿題を出す」（62%>49%）、それに「小テストをする」（50%>42%）ではいずれも女子教師が上回っている。そして「脱線して授業を終わること」（女子11%<男子19%）も少ないものである。

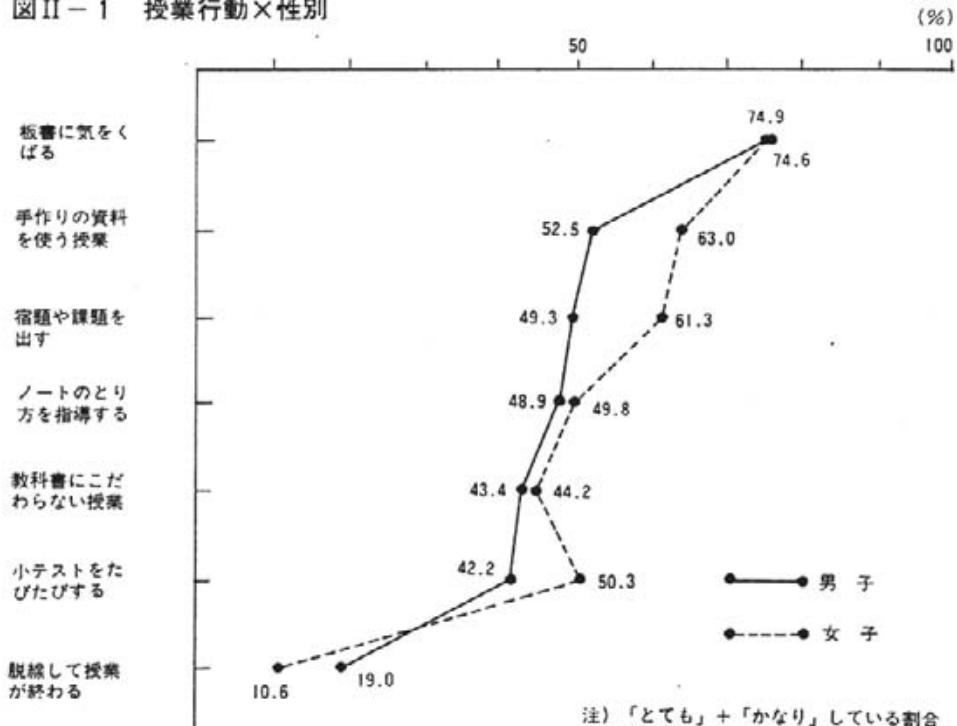
高校教師の中で女子教師の占める比率は2割弱（18%）と少なく、むしろ影が薄い。しかるに授業行動を見るかぎり、熱心さは男子教師に負けてはいない。それどころか、正確には男子教師よりきめ細かくて、エネルギーを注いでいるようだ。

したがって、高校教師の授業行動は、担当する教科によって異なり、総じて思いのほかていねいで、きめ細かい指導姿勢をとっている。そして、その傾向は、男子教師より女子

表II-3 授業行動×年齢



図II-1 授業行動×性別



教師に強く、教職経験が10年をすぎると強くなり、50歳以上になると円熟してくる。

『中学教師の生活と意見』(モノグラフ中学生の世界 vol. 7)によれば、「教師としてかっこうがつくまでは4~5年かかり、「一

人前」の教師になるには、短くとも7~8年、やはり10年ぐらいの年期が必要」という。そうしてみると、高校も中学校も授業を行う者として一人前になるには、ほぼ同じ期間、そしてかなりの年数を要するようだ。

## 2. 授業以外にも労を惜しまない教師たち――

### (1) 生徒指導に熱意ある態度

いまでもなく教師の仕事は授業だけではない。とりわけ、さまざまなニーズを持ち、質的にも異なった生徒が高校へ入学している現在、生徒指導の視点から生徒一人ひとりを尊重して自己実現を可能とするための仕事や方法が重要になる。

それでは、教師は、授業のほかに、どんな活動をしているのだろうか。教師のライフスタイルを中心とした生態は、V章で詳しく述べることとし、ここでは教師の教育指導の姿

勢に的をしづりたい。

まず表II-4に注目してほしい。これは教師の教育指導の姿勢を9項目から探ってみたものである。「とても」と「かなり」を加えた数値で見ていくと、「生徒の質問や相談には親身に答えている」(93%)や、「タバコを吸っている生徒をみかけると厳しく注意する」(91%)と答えた者は9割を超える。

それから「生徒の年賀状にはまめに返事を書いている」(71%)や「担当する教科の専門書にはよく目を通している」(65%)、「37度ぐらいの熱でも無理して出勤している」(64)

%)と答える者は6~7割いる。

確かに、「生徒に人気のあるマンガや音楽に接するようにしている」(7%)や「クラブ活動を熱心に指導している」(27%)という答えは少ない。

しかし生徒の質問や相談に親身に対応し、年賀状にはまことに返事を書き、タバコをすう生徒には厳しい態度で臨むという、暖かくて生徒を大事にしている教師が多い。しかも担当する教科の専門書に目を通して専門的な力

量を深める教師や、少々の病氣なら無理して学校へ出かける熱意のある教師も少なからずいる。

このように、高校教師はきめ細かい授業をしているだけでなく、生徒指導の姿勢も、生徒を大切にし、暖かく接している。さらに専門性を高める努力を怠らず、職務への熱意もある。あくまでも教師サイドの目ではあるが、生徒に対して暖かく、教育指導に熱意を持った教師たちの姿が浮かびあがってくる。

表II-4 高校教師の教育指導の姿勢

項目	尺度		半分半分	していない	
	とても	かなり		あまり	まったく
生徒の質問や相談には親身に答える	35.9 92.5	56.6	6.7	0.7 0.8	0.1
タバコを厳しく注意する	57.5 90.8	33.3	5.9	1.6 3.3	1.7
年賀状にはまことに返事をかく	45.3 70.1	23.8	10.7	11.4 19.2	7.8
専門書に目を通す	20.8 65.3	44.5	25.7	8.3 9.0	0.7
37度の熱でも出勤する	30.9 63.5	32.6	22.6	9.6 13.9	4.3
始業時間の30分前に学校へ着いている	34.6 53.5	18.9	14.6	20.0 31.9	11.9
生徒会や音楽部等で活動する	11.1 37.6	26.5	26.2	26.6 36.2	9.6
クラブ活動を熱心に指導する	8.6 27.1	18.5	29.0	34.0 43.9	9.9
生徒に人気のあるマンガや音楽に接する	1.6 6.8	5.2	19.6	41.6 73.6	32.0

## (2)年齢別に見る生徒指導

次に、日常の教育指導の姿勢が、教師の年齢によってどのように変わるかを調べたのが表II-5である。表中の数値はここでも「とても」と「かなり」を加えたもので、有意の差のある項目の最も高い数値に○、最も低いものに――を付してある。

この表から大きく二つのことが読みとれる。一つは、大多数の教師が「している」と答えた「質問や相談には親身に答える」や「タバコは厳しく注意する」、それに次ぐ「年賀状の返事はこまめにかく」という項目には、年齢差が見られないことである。

もう一つは、年齢によって数値が減る項目と、増える項目があることだ。年齢があがるにつれて数値が減るのは、「クラブ活動の指導を熱心にする」や「生徒に人気のあるマンガや音楽に接する」という項目である。例え

ばクラブ活動の指導では、30代の前半までは3割を超えていて、50歳以上になると、19%と2割以下となっている。逆に「担当する教科の専門書によく目を通す」や、「始業時間の30分前に学校へ着く」という項目はだいたい年齢とともに増えている。例えば専門書に目を通す者は30歳以下の60%がしだいに増えて、50歳以上では72%となる。

こうした結果から、具体的な教育指導の方法に関しては、多数の教師が実行している項目は、年齢をとわず行われている。他方、年齢の差がはっきりするのは、あまり行われていない事柄に限定されているといえそうだ。このことは、データは割愛したが、性別や担当教科別のクロス結果からもいえる。

したがって、高校教師の教育指導の姿勢は、総じて厳しくあるが生徒とのふれあいを大切にする熱意のこもったものである。

表II-5 教育指導の姿勢×年齢

年齢	(%)					
項目	30歳以下	31~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50歳以上
生徒の質問や相談に親身に答える	90.7	91.6	92.8	91.6	93.9	94.6
タバコを厳しく注意する	83.9	91.6	90.6	93.4	93.7	91.7
年賀状にはこまめに返事をかく	73.6	66.4	72.9	72.7	66.1	68.9
専門書によく目を通す	60.1	59.0	< 63.7	63.0 <	71.6 <	72.0
37度の熱で出勤する	65.6	65.2	63.7	65.0	61.4	61.0
始業時間の30分前に学校へ着いている	49.4	42.0	< 47.8	51.9 <	61.2 <	63.9
指導用の講義ノートを作る	40.6	> 38.0	> 32.4	< 33.4	< 34.6	< 44.0
クラブ活動を熱心に指導	31.5	(33.2)	> 27.2	28.8	> 25.8	> 18.8
生徒に人気のあるマンガや音楽に接する	(16.3)	> 5.9	> 4.5	5.7	> 4.4	> 3.7

注) とてもそうしている  
かなりそうしている  
半分半分  
あまりそうしていない  
まったくそうしていない

%

○ 最高値 ————— 最低値

### 3. わかりやすい授業を高く評価

#### (1) 優秀な教師とは

さて、これまで教師の仕事ぶりの実態を明らかにしてきたが、彼らはどんな同僚を高く評価しているのだろうか。授業に熱心な教師だろうか、それとも生徒の理解にエネルギーを注いでいる教師だろうか。

表II-6は、これまでの先行研究で高く評価されていた項目を9個あげ、そこから順に3個選んでもらい、中でも1番目に選ばれたものに注目した結果である。高く評価する同僚のベスト3は次の通りである。

第1位……授業がわかりやすい=48%

第2位……専門の知識がしっかりしている=29%

第3位……どの生徒にも公平に接する=14%

生徒にわかりやすい授業をする同僚を1位にあげた者は、48%と5割に近く、他よりも多い。次が、専門の知識がしっかりしている同僚で29%とほぼ3割いる。したがって、こうした教科指導にかかる観点で、同僚を高く評価する者は、77%と8割近くもいる。

他方、「どの生徒にも公平に接する」(14%)や「悩みごとと一緒に考えてくれる」(5

表II-6 教師が高く評価する同僚

(1番高く評価する先生:%)

1位	授業がわかりやすい	48.2
2位	専門についての知識がしっかりした	29.1
3位	どの生徒にも公平に接する	13.5
4位	悩みごとと一緒に考えてくれる	5.0
5位	生徒にきまりを守らせることができる	3.2
6位	おそらくまでクラブ活動を指導する	0.6
7位	授業中たまに脱線する	0.4
8位	生徒に人気のあるマンガなど読んでいる	0.0
9位	センスのよい服装を身につけている	0.0

%)、それに「おそらくまでクラブ活動を指導する」(1%)というどちらかといえば、生徒とのふれあいを大切にする同僚を高く評価する者は、19%と2割にも満たない。また、「生徒に人気のあるマンガなどを読む」や、「センスのよい服装を身につけている」同僚を第1位にあげる者はまったくいない。

どうやら高校では、授業で勝負できない教師は、同僚から暖かい目で見られないようである。ややもすれば、教科の専門性に固執しがちな高校教師の習性を考えると、こうした結果も当然かもしれない。

また、教科指導の特性に秀でた同僚を高く評価する視点は、生徒がどのような教師を望んでいるかと見ているかの結果にも見い出される。表II-7は、同僚教師のときと同じ項目を使い、それぞれについて、生徒がどれく

らい望んでいると思うかを調べたものである。

その中で8割以上の者があげた、生徒が望む教師像の特性は次の通りである。

- 授業がわかりやすい ..... 99%
- どの生徒にも公平に接する ..... 99%
- 専門の知識がしっかりして  
いる ..... 91%
- 悩みごとを一緒に考える ..... 81%

生徒の望む教師においては、「公平に接する」や「悩みごとを一緒に」という、生徒とのふれあいを重んずる指導特性が高い数値を示す。同時に、やはりここでも「授業がわかりやすい教師」に代表される、教科指導の特性が高い数値を示している。

表II-7 生徒の望む教師

(%)

項目	尺度		望む		望まない	
	とても	かなり	あまり	まったく	あまり	全く
どの生徒にも公平に接する	67.1 98.4	31.3	1.5 1.6	0.1		
授業がわかりやすい	64.7 98.7	34.0	1.2 1.3	0.1		
専門の知識がしっかりしている	49.4 91.3	41.9	8.1 8.7	0.6		
授業中も常に笑顔である	31.0 81.2	50.2	17.4 18.8	1.4		
さりげなくやさしい	14.4 65.2	50.8	31.8 34.8	3.0		
クラブ活動を指導する	14.0 72.7	58.7	25.9 27.3	1.4		
授業中常に激励する	10.9 69.5	58.6	28.6 30.5	1.9		
センスのよい服装をする	2.5 28.2	25.7	58.3 71.8	13.5		
人気のあるマンガを読む	1.4 15.8	14.4	56.1 84.2	28.1		

## (2)教師の評価

ところで、このような教科指導に秀でた同僚を高く評価する傾向は、担当する教科によって変わるのだろうか。それを調べたのが表II-8である。各教科ごとに、1位○、2位△、3位□で示している。

表が示すように、教科によって多少数値のちらばりは見られるが、どの教科も第1位は「授業がわかりやすい」、第2位「専門の知識がしっかりしている」、第3位「生徒に公平に接する」という順位に変わりはない。ただし、「体育」担当教師に、「きまりを守らせることができる教師」が、第3位に浮上している。

本章第1節に述べたように、教科によって授業の仕方はかなり異なっていた。しかし、同僚を評価する視点は、ほとんどどの教科も

同じである。やはり、専門的に深く掘りさげた、生徒にわかりやすい授業をする教師が高く評価される。

次に、年齢別による変化を見たのが表II-9である。表II-8と同じ表示がしてある。ここでも同僚を高く評価する指導特性の順位は変わらない。

しかし、興味深いことに「専門についての知識がしっかりしている教師」では、数値、21%（30歳以下）→24%（31~34歳）→31%（35~39歳）→32%（40~44歳）→35%（45~49歳）→31%（50歳以上）が示すように、年をとるにつれて、これを重んじる者が増えている。キャリアを積むほど、専門がしっかりした教師をより高く評価するようになる。

他方、第4位にある「生徒の悩みと一緒に考えてくれる教師」は、数値が9%（30歳以下）→5%（31~34歳）→5%（35~39歳）

表II-8 同僚の評価（第1位）×教科

教科 項目	英語	国語	数学	社会	理科	芸術・家庭	体育	(%)
授業がわかりやすい	47.4	45.8	49.1	47.4	53.2	45.0	46.3	
専門の知識がしっかりしている	28.7	33.3	28.5	27.4	26.1	30.4	28.6	
生徒に公平に接する	12.4	13.8	13.1	14.8	14.2	17.4	5.4	
きまりを守らせる	5.5	4.8	5.2	4.5	5.0	5.8	3.6	
生徒の悩みと一緒に考える	4.7	1.7	3.5	3.2	1.1	1.4	12.5	
教材に対する知識	0.5	0.3	0.3	1.6	0.0	0.0	3.6	
教科書に対する知識	0.8	0.3	0.3	0.6	0.4	0.0	0.0	
センスのよい服装	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
人気マンガを読む	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

注) ○……一番多い数値  
△……二番目に多い数値  
□……三番目に多い数値

→ 4% (40~44歳) → 3% (45~49歳) → 3% (50歳以上)と、年齢とともに減っていく。すなわち若い教師ほど生徒との人間的なふれあいを大事にする同僚を重んじる傾向がある。

また、その変化を教師の勤務する学校ランク別に調べたものが表II-10である。なお、学校ランクは、共通一次の受験者数によって「2割以下」から「ほぼ全員」まで5段階に分けてある。

表を一覧してわかるように、学校ランクによって同僚を高く評価する視点が少し変わってくる。これまで「授業がわかりやすい教師」は常にトップにあげられていた。ところが、共通一次の受験者が「ほぼ全員」という進学校の教師では、「専門の知識がしっかりしている教師」(43%)が1位になる。そして、こうした専門のしっかりした同僚を高く評価する傾向は、共通一次の受験者が増える

にしたがい強くなる。例えば、その割合は「受験者2割以下」の学校の数値23%に対して、「ほぼ全員」の学校は43%と4割を超える。

他方、「授業がわかりやすい教師」は、多くの学校で1位にあるが、表中の不等号が示すように、非進学校ほどそうした同僚を高く評価する傾向が強い。また、「生徒の悩みと一緒に考える」教師も、非進学校になるほど数値が増える。

以上のことから、学校ランク別からみた同僚評価は、マクロ的には大きな変化は見られない。しかし、深く掘りさげてみると進学校になるほど授業のわかりやすさよりも、専門がしっかりしているかが、同僚を評価する際重要なとなる。逆に、非進学校ほど、専門の知識よりも授業のわかりやすさ、それから生徒とのふれあいが、同僚評価の分かれ目となっている。

表II-9 同僚の評価（第1位）×年齢

項目	年齢 (%)					
	30歳以下	31~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50歳以上
授業がわかりやすい	(48.7)	(53.1)	(48.5)	(46.3)	(47.3)	(46.8)
専門がしっかりしている	(20.7) < (23.8) < (30.9) < (31.6) < (35.3) < (31.3)					
生徒に公平に接する	(15.2)	(12.1)	(11.1)	(14.6)	(11.6)	(15.1)
生徒へ叱られる	9.4 > 5.4 > 5.3 > 3.6 > 2.9 > 3.4					
生徒に守らせる	3.3	4.6	2.3	3.3	2.9	3.1
生徒でクラブ指導する	2.1	0.4	0.4	0.6	0.0	0.0
生徒に説教する	0.6	0.4	1.5	0.0	0.0	0.3
センスのよい服装	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ハグランガをまじ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注) ○……一番多い数値  
○○……二番目に多い数値  
□……三番目に多い数値

表II-10 同僚に対する評価×学校ランク

(%)

学校ランク 項目	共通一次受験者 2割以下	共通一次受験者 3割ぐらい	共通一次受験者 半数ぐらい	共通一次受験者 7割ぐらい	共通一次受験者 ほぼ全員
授業がわかりやすい	(51.8)	> (46.8)	> (45.6)	(49.8)	> (32.3)
専門がしっかりしている	(23.3)	< (33.2)	(32.4)	(32.1)	< (42.8)
生徒に公平に接する	(14.5)	(9.2)	(13.7)	(13.6)	(17.3)
悩みを一緒に考える	6.3	> 5.2	> 3.2	> 1.5	< 4.5
きまりを守らせる	3.5	4.3	4.6	1.1	0.8
おそくまでクラブ指導する	0.4	0.5	0.5	1.1	1.5
授業中たまに説教する	0.2	0.8	0.0	0.8	0.8
センスのない服装	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人気マンガを読む	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

注) ○……一番多い数値  
 ◎……二番目に多い数値  
 □……三番目に多い数値

このような同僚評価の視点は、年齢別のランクと似かよっている。しかし、第I章・表I-2の「学校ランクと年齢のクロス」を見てもわかるように(P12参照)、非進学校では若干、若い年齢層が多いけれども、進学校で

は、必ずしも高い年齢層の教師が多いという事実はない。すると、学校ランク差による同僚評価の違いは、多少学校の年齢構成のあり方も無視できないが勤務校が進学校か非進学校かという軸が大きく浮かびあがってくる。

## 4. 高校教師って何?

### (1)高校教師の仕事

高校教師は、授業はきめ細かく、生徒指導にも労を惜しまない。そして専門知識がしっかりとしていてわかりやすい授業をする同僚を高く評価している。こうした教師像のスケッチが、日常の仕事ぶりから描ける。

それでは、彼らは教職をどのように評価しているのであろうか。それを調べたものが、表II-11である。これは「高校の教師の仕事」を9項目によって評価してもらった結果を、数値の高い順に示したものである。

「とても」と「まあ」をあわせた数値に注目するとほぼ8割から9割の者が「そう思っ

表II-11 教職の評価

(%)

尺度 項目	そう思う		思わない	
	とても	まあ	あまり	せんぜん
精神的に気苦労の多い仕事	43.1 (89.2)	46.1	4.2 4.8	0.6
生徒と接する喜びのある仕事	32.4 (86.2)	53.8	2.6 2.9	0.3
体力のいる仕事	26.7 (78.8)	52.1	6.8 7.5	0.7
専門に關じて高度の知識が必要な仕事	25.1 (77.1)	52.0	7.9 8.9	1.0
社会的に重視される仕事	7.0 49.2	42.2	15.8 17.6	1.8
大学の教師よりやりがいがある仕事	9.7 32.6	22.9	14.4 19.1	4.7
小・中学校の教師より楽な仕事	4.6 28.7	24.1	19.6 33.7	14.1
時間にゆとりのある仕事	2.1 19.5	17.4	35.6 (60.7)	25.1
経済的にめぐまれた仕事	0.6 12.2	11.6	44.7 (60.1)	15.4

ている」のは次の通りである。

- 1位・精神的に気苦労の多い仕事……89%
- 2位・生徒と接する喜びのある仕事……86%
- 3位・体力のいる仕事……79%
- 4位・高度の知識が必要な仕事……77%

また「小・中学校の教師より楽な仕事」(29%)、「時間的にゆとりがある」(20%)、そして「経済的にめぐまれた仕事」(12%)と思う者は少ない。今、1週間の授業の持ち時間数を調べてみると、平均で、小学校22.4時間、中学校17.9時間、そして高校は14.5時間である。単純に時間数だけで比較すると、高校の教師は小・中学校の教師よりも、時間にゆとりがあり、楽な気もする。また、給与の面

でもわずかではあるが、高校教師の方が高い。しかし彼ら自身の中に、小・中学校よりも楽な仕事だとする者は意外に少ない。

むしろ、高校教師は高度の知識が必要なわりには、時間的なゆとりがなく、経済的にもめぐまれていない。しかも体力のいる仕事であり、精神的な気苦労が多い。とりわけ「精神的に気苦労の多い仕事」で「とてもそう思う」者が43%と4割以上いる事実から、気苦労の多い仕事を熱心にやっているわりには、物質的な報いが少ない、というぐちさえ聞こえてきそうだ。

そうした反面「喜びのある仕事」と答える者が86%と9割近くもいる。物質的な報いが少なく、体力がいり、気苦労は多いのだが、喜びもある仕事と評価している。ジキルとハイドではないが、アンビバレンツな心境にあ

るというのがいつわらざる気持ちであろう。

このような教職についての全体的な評価は性別や教科別、それから学校ランク別においても大きな差は見られない。そのデータは割愛した。ただし、年齢別においては、興味深い事実が見られる。

表II-12は年齢別に評価を調べたものである。まず表中の不等号に注目すると、若い教師ほど「体力のいる仕事」であり、「大学の教師よりやりかいのある仕事」と思う傾向が強い。一方、高年齢になるほど数値が増える傾向がうかがえるのは、「専門に関して高度な知識が必要な仕事」、「社会的に尊敬される仕事」、それから「小・中学校の教師より楽な仕事」、「時間的にゆとりのある仕事」などである。

もう一つは「50歳以上」の教師が各年齢層の中で最も好意的に教職を評価している。表

中の○が最も多くなっている。逆に「31~34歳」の年齢層がいちばん低く評価している――が多いことがわかる。

そうすると、若い教師は、高校教師は時間的ゆとりがなく体力が必要で、小・中学校の教師より楽な仕事でないが、大学の教師よりやりかいのある仕事と思う。また、高年齢の教師は、高度の知識が必要で、社会的に尊敬され、小・中学校の教師より楽で、喜びの多い仕事であると思われる。そして、教職の全体的評価において、「31~34歳」の層と「50歳以上」の層に大きなへだたりが見られる。

以上が教職に対する全体的な評価である。その中で先に指摘した「精神的に気苦労の多い仕事」と見る者が多く、「とてもそう思う」教師が4割を超えていた点に注目したい。どのような教師がそう思っているのであろうか、

表II-12 教職の評価×年齢

年齢 項目	30歳以下	31~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50歳以上
精神的に気苦労が多い仕事	89.9	90.8	(91.2)	87.7	89.2	87.3
生徒と接する喜びのある仕事	87.7	81.6	85.1 <	85.8 <	87.0 <	(88.4)
体力のいる仕事	(84.1) >	82.8 >	77.9 >	76.5 >	74.8	77.0
高度の知識が必要な仕事	76.4	71.7	71.4 <	76.8 <	79.8 <	(83.5)
社会的に尊敬される仕事	46.3	38.9	< 49.4	47.5 <	(49.6) <	(58.8)
大学の教師よりやりかいがある仕事	(40.0) >	32.7 >	29.5 >	29.4 >	28.8 <	34.1
小・中学校の教師より楽な仕事	25.8 <	26.8 <	27.9 <	27.5 <	(31.6)	31.5
時間ゆとりがある仕事	18.8	15.1 <	15.2 <	21.1 <	19.1 <	(24.6)
経済的にめぐされた仕事	14.1	10.0	14.5	8.8	10.1	(15.0)

注) とても  
そう思う  
かなり  
そう思う  
どちら  
でもない  
あまり  
そう思わない  
ぜんぜん  
そう思わない

%  


それを林の数量化II類によって調べたのが、図II-2である。

外的基準は「とてもそう思う」グループ(43%)と、「それ以外」のグループ(57%)となっている。図の見方を少し説明すると、ペクトルがプラスの方向(右側)に行くほど、「とても精神的な気苦労の多い仕事」と思う傾向が強いことを示している。そして各アイテム・カテゴリーのレンジの幅

の大きいほど、外的基準の弁別力(二つのグループに仕分ける力)が強いということになる。

図中の属性の左に示した順位(偏相関係数の高い順)からわかるように、精神的に気苦労が多いととても思っている者の属性は



年齢が若く、私立大学出身、非進学校で体育か国語の授業を担当し、教材研究を熱心にやり、テレビもよくみている者が、高校教師の仕事には気苦労が多いと感じている。

それに反して、それほど気苦労を感じない者の属性は次の通りである。

- ①年齢
- ②教材研究の時間
- ③小遣いの額
- ④勤務校の学校ランク
- ⑤出身学校

が説明力が大きい。

そこで各アイテムのカテゴリー・スコアの中から、とくに精神的に気苦労の多い仕事と思っている属性を拾ってみると

- ①年齢は30代と20代
- ②教材研究を1日に2時間以上している
- ③担当教科は体育か国語
- ④出身学校は私立大学
- ⑤勤務校は非進学校(共通一次受験者2割以下)
- ⑥校務分掌は校長・教頭
- ⑦テレビの視聴は2時間以上

となる。

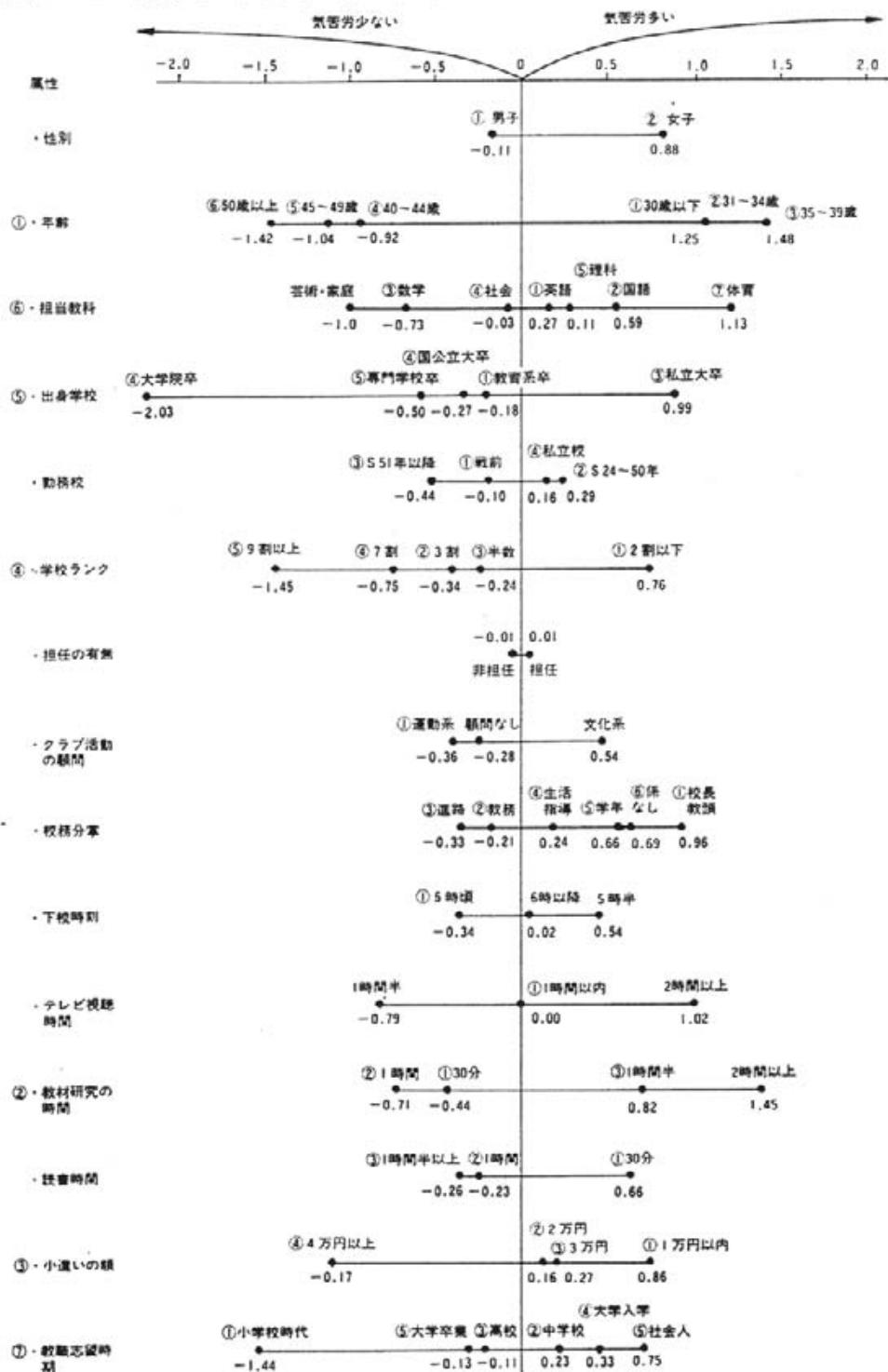
- ①大学院を修了している
- ②小学生の頃から高校教師を志望する
- ③年齢40歳以上
- ④勤務校の進学率は高い
- ⑤小遣いが月に4万円以上
- ⑥担当教科は芸術・家庭・数学

小学校の頃から高校教師になりたいと思い、年齢は40歳以上で、進学校に勤務し、芸術・家庭や数学を担当し、小遣いに不自由しない者が、高校教師の仕事は気軽とまでいかないにせよ、さして気苦労を感じていないことが読みとれるのである。

本章では、高校教師がどんな仕事を行い、どんな同僚を高く評価しているか、そして教職をどう見ているか探ってきた。すなわち、「仕事」から高校教師の姿をうきぱりにした。

全体的に見て、高校教師はていねいできめ細かい授業をしており、しかも「授業」以外にも生徒とのパーソナルな接触を保っている。

図II-2 精神的に気苦労の多い仕事か



ここから生徒のことを考えた、仕事熱心な教師像が浮かんでくる。したがって、同僚を評価する視点も当然ながら仕事に関する力量の有無に力点がおかれている。とりわけ「授業」で勝負できているかどうかが、評価の分かれ目となる。そして、こうした日常の仕事ぶりから、教職は、高度な知識と体力が要求されて、精神的な苦労の多い仕事という認識が生まれている。と同時に、この精神的な気苦労が報われもある、喜びのある仕事だとも思っている。

ところで、高校にはさまざまな教師がいる。そうした教師たちの中で、年齢という属性が最も大きなウエイトを占めているようである。高齢者ほど授業がていねいで、教育指導に熱意を持っている。そして、日頃から専門書に

も目を通し、専門的な知識のしっかりした同僚を高く評価している。その上教職は、高度な知識が必要で、社会的に尊敬され喜びのある仕事だとも思っている。

他方、若い教師は授業よりもクラブ活動の指導に熱心で、生徒と悩みと一緒に考えるように生徒とのヒューマンなふれあいに力を入れている。したがって、高校教師の仕事は体力が必要で、精神的にも気苦労が多いと思いつかである。

このように、「仕事」に対する姿勢において高校教師の間には世代間のズレがみられ、現在の高校がかかえる問題が教師の中にも生じていると指摘できる。以下の章においてこうした世代間の問題が具体的に論じられる。

## 第III章 高校教師は生徒をどう見ているか



学校の教師というのは、ひと目見たときにそれとわかるといわれる。しかし、同じ教師でも、小・中・高校・大学ではそのただよわせる雰囲気はまったく違っている。その中で高校の教師の特徴はどのようなものであろうか。

まずここでは、教師たちが高校時代にどのような生徒であったかを尋ねることを通して高校教師の特徴をさぐってみよう。高校時代というのは、個人の性格の形成の顕著な時期

の一つである。また、教師たちは自分の高校時代の過ごし方を一つのモデルとして、生徒たちの高校生活を判断している面があると思われる。

次いで、教師たちが、生徒の生活をどう見ているかを明らかにする。状況の規定としての生徒觀は、それ自身が独立変数として働き、一定の教育効果を生んでいく。そこにどのような問題があるのかを明らかにする。

# 1. 教師の高校時代の過ごし方

## (1)全体的傾向

表III-1は、教師たちがその高校時代に、それぞれのことについて、1「よくした」、2「かなりした」、3「少しした」、4「ほとんどしなかった」の4段階で答えてもらった結果である。

これを見ると、教師たちの高校時代は、勉強を中心とした生活であり、通っている学校

に高い誇りを持ち、学校生活に対してきわめて高い適応性を示していたことがわかる。言い換えれば、高校時代の「優等生」が、現在高校の教師となっているのである。

では勉強以外の側面はどうであろうか。「クラブ・部活動に打ち込んだ」という項目では「よくした」(14%)と「かなりした」(22%)と合わせて、36%と約3分の1であり、残りの3分の2は「ほとんどしなかった」と

表III-1 教師の高校時代の生活

項目	尺度	(%)			
		よくした	かなりした	少しした	ほとんどしなかった
その高校の生徒であることに誇りを感じた		23.5 66.7	43.2	24.5 33.3	8.8
大学進学をめざして熱心に勉強した		17.0 64.3	47.3	29.7 35.7	6.0
毎日朝起きて体操をした		13.3 53.9	40.6	38.7 46.1	7.4
クラブ・部活動に打ち込んだ		11.6 54.9	43.3	36.4 45.1	8.7
友達との間で内訌(内紛)があった		13.6 35.7	22.1	32.1 64.3	32.2
外で友達と一緒に遊びました		6.9 35.5	28.6	45.7 64.8	19.1
お出で用意をするのが大変だった		5.7 29.2	23.5	51.4 70.8	19.4
おののくには友達下さいました		1.3 8.8	7.5	30.2 91.2	61.0
テレビや映画など見ていました		1.0 4.1	3.1	17.5 95.9	78.4
個性をつきました		1.3 5.7	4.4	27.9 94.3	66.4
音楽や絵画などをしました		0.5 3.7	3.2	29.5 96.3	66.8

「少しだけ」である。教師たちの高校時代のクラブ・部活動への打ち込みは少なかったようである。高校時代のクラブ経験は、教師になってからのクラブ指導のみならず、生徒との接觸や、生徒理解を、大いに助けるといわれるが、クラブ経験3分の1という数字は、その生徒理解を難しくしている原因の一つかもしれない。

また、今の高校生には多い遊び型や反抗型、あるいは無気力型の高校生活を送った教師たちは少ないようである。遊び型の属性の一つである「異性とつきあった」は6%、反抗型の属性である「学校の規則に反発を感じた」は9%であり、無気力型を示す「何事にも無気力だった」4%、「テレビを1日に3時間以上みた」4%と、きわめて低い割合となっている。

このように全体として見ると、高校の教師たちは、高校時代は勉強を中心とした生活を送り、学校に反発したり、学校不適応から遊びに逃避したり無気力になったりすることはなかった。そして、クラブ活動の経験のある者は3分の1で、勉強よりはスポーツ、集団活動の方に打ち込んだ者も少なかったのである。つまり、素直でまじめな「優等生」が多くたと言える。

したがって、高校への進学率が高まり、かつての高校とは違って多様な生徒が入学してきている今の高校生に対し、彼らを迎撃つ高校教師の側が、勉強中心の高校生活を送った者ばかりというのは、多少心もとない気がする。今の高校生の多くに見られる学校不適応、勉強嫌い、遊び志向、クラブ志向を、充分理解し、適切な教育指導ができるような生活体験の裏づけが、高校教師の側に少ないものである。

## (2)属性別傾向

高校教師の高校時代の過ごし方は、一様ではなく、属性による差も当然ながら見られる。その点を次に検討しよう。

性別で見ると大きな差はないが、「毎日予

習・復習をした」が、男子(53%)より、女子(60%)に多いこと、「政治的・社会的関心が高かった」は、女子(27%)より男子(36%)に多いという二つの項目に違いがある。

年齢別に見ると、図III-1のように、30歳以下をはじめとして、若い教師層に新しい傾向があらわれている。「勉強型」の優等生というよりは、クラブ活動も熱心にやり、学校に反発したり、異性とのつきあいのあった教師も増加している。しかしこれと、同世代の他の職種についた者と比べれば、必ずしも多いとは言えない。

また、高校時代の楽しさやクラブ活動への参加に関してはU字型曲線を描き、30代後半や40代の教師に落ち込みが見られる。それに対して、50歳以上の教師は、一つの気骨ともいうべきものを持っている。高校時代も勉強を中心にクラブ活動もやり、通っている学校に高い誇りを持ち、信念のある学校生活を送っている。中等教育への進学率の低かった時代のエリートとしての自負がなせるわざとも思われる。

担当教科別にみると、教科によってかなりの違いがあつて興味深い。(表III-2)

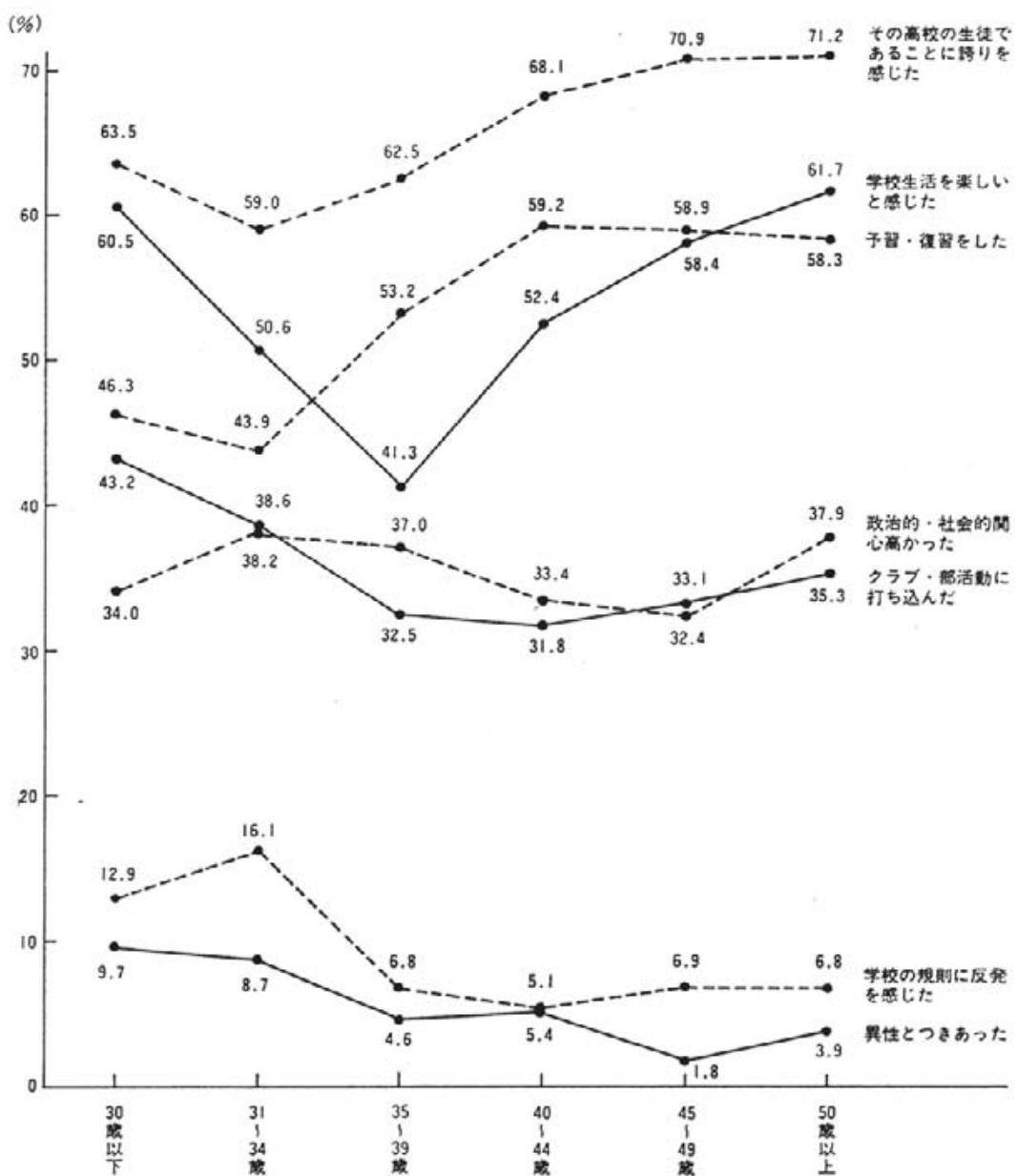
高校時代によく勉強したのは、英語と数学の教師であり、逆に勉強はあまりしなかったのは、体育と芸術・家庭の教師である。クラブ活動に打ち込んでいたのは、体育(95%)と、芸術・家庭(49%)の教師であり、英語と数学の教師のクラブ活動参加は3割以下と少ない。社会の教師は、政治的・社会的関心が高かった者が多く(53%)、国語の教師は、学校の規則に反発を感じた者が多少めだつ(13%)。

体育の教師はなかなかユニークで、先に見たクラブ活動への打ち込みだけでなく、クラスの仕事をすんで引き受け(42%)、高校生活を最も楽しんでいる(79%)。この体育の教師ときわだった対照を示すのが英語と数学の教師である。勉強一筋の、まじめ派がその特徴である。

このような教師自身の高校時代の過ごし方

図III-1 教師の高校時代×年齢

「よくした」+「かなりした」割合



は、その後の教職についてからの活動にさまざまな影響を与えていていると考えられる。

年齢別や教科別に見られる違いに、その一端を読みとることができるであろう。

表III-2 教師の高校時代×担当教科

(%)

項目	担当教科	英語	国語	数学	社会	理科	芸術 家庭	体育
その高校の生徒であることに誇りを感じた		61.1	60.9	71.2	66.5	73.9	71.0	70.2
大学進学をめざして熱心に勉強した		74.5	61.2	65.8	63.0	63.8	47.1	42.1
まで毎日、予習・復習をした		63.7	48.6	56.5	51.0	55.9	39.1	26.3
学校生活を楽しいと感じた		51.7	53.6	53.4	52.2	58.1	56.1	79.0
クラブ・部活動に打ち込んだ		28.9	35.8	29.1	36.0	36.8	49.3	94.7
政治的・社会的関心が高かった		29.9	37.9	27.7	52.7	33.6	24.6	28.1
クラスの仕事をすすんで引き受けた		29.6	33.1	19.3	29.3	29.2	35.3	42.1
学校の規則に反発を感じた		8.4	13.4	6.4	9.6	6.8	7.3	8.8
テレビを1日3時間以上みた		4.9	4.2	2.5	7.1	2.5	6.2	0.0
異性とつきあつた		6.6	7.5	2.3	7.1	3.4	4.3	10.6
何事にも無気力だった		2.6	4.5	4.1	3.9	3.8	4.5	1.8

注) 数字は、各教科ごとによくしたとかなりしたの割合

○ 1位 ○ 2位 — 最下位

## 2. 教師と生徒の高校時代の違い

教師の高校時代と、今の高校生の生活の違いを見たのが図III-2である。大きく二つに分かれる。

教師が高校時代に今の生徒よりよくしていたこと5項目(左側)、今の高校生の方がよくしていること6項目(右側)の二つに分かれる。

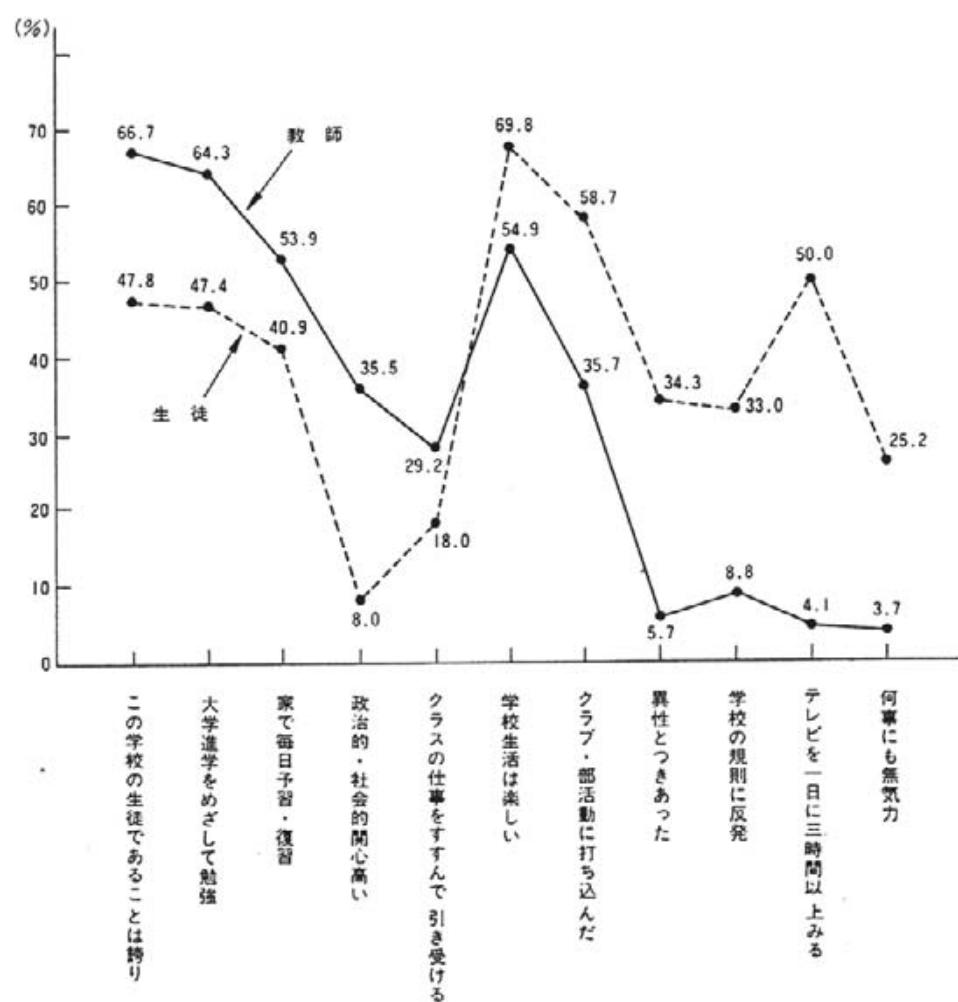
教師たちの高校時代は、勉強や進学を中心に行なった生活を送り、政治的・社会的な関心も高く、クラスの仕事もすすんで引き受けている。一方、今の高校生たちは、勉強よりもクラブ活動・異性とのつきあいといっ

た人間関係的な侧面、ないし遊びの側面に傾斜した生活を送っている。また彼らは、学校の規則への反発を強め、勉強への不適応から無気力になったり、テレビに逃避したりする生徒も増えている。少なくとも教師たちはそういう判断している。

また、学校生活を楽しむことは、今の高校生の方が上手になっているが、その内容は以前とはまったく違っている。教師たちの高校時代は勉強をし、大学に進学することに誇りを見い出すことができ、学校生活にも充実感を抱いていた。それに対して今の高校生は勉

図III-2 教師と生徒の高校生活の違い

(教師:よくした+かなりしたの割合)  
(生徒:とても多い+かなりいるの割合)



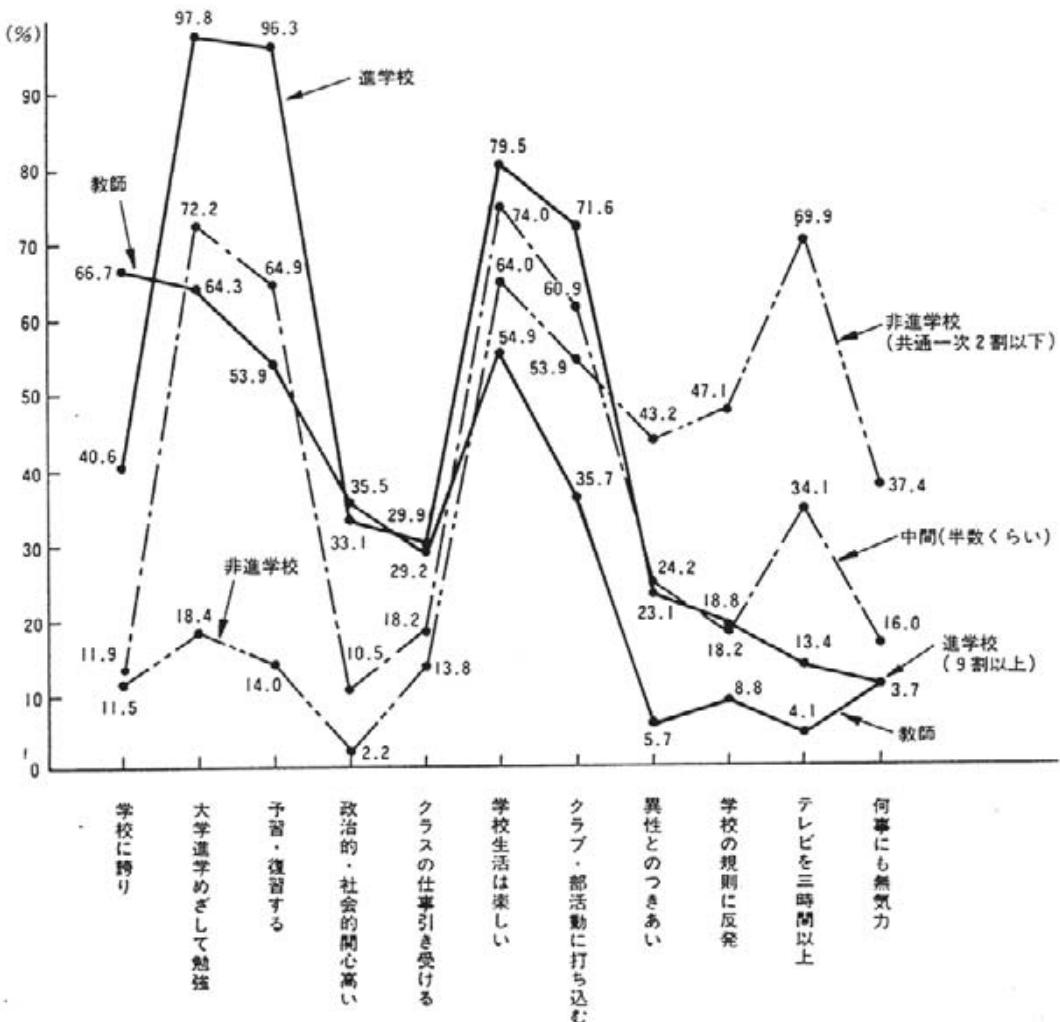
強より、クラブ活動や人間関係に学校生活の楽しさを感じている。この世代間のギャップに、教師たちの方がとまどいを感じている。

ただ次の点には注意する必要がある。昔も今と同様、勉強よりもクラブ活動や遊びに没頭していた生徒もかなりいたのかもしれない。たまたま勉強好きの生徒たちが、高校教師という道を歩んだ、その結果なのかもしれないということである。今回は高校教師の高校時代についてのデータだけで、広く一般の人々

きいたわけではない。そのためこの点を直接明らかにすることはできない。そのかわり、今の高校生の側の分化と、高校教師の平均とを比較してみよう。

高校生の行動様式の分化は、学校格差に対応しているというのが、これまでの生徒調査で明らかになっている(『モノグラフ高校生』vol.2, vol.3, vol.5 参照)。図III-3は、高校の格差(共通一次受験者の割合による)別に、今の高校生の生活と、教師の高校時代を

図III-3 学校格差別にみた高校生の生活と教師の高校時代



プロットしたものである。この図は、今の高校生がどのような生活を送るかが、どのようなランクの学校へ入るかによって大きく変わることを、教師自身もはっきり認めていることを示している。

しかし、今の高校生がどのようなタイプの学校に通おうとも、ほとんどの領域で、教師たちの昔の高校生活とは違っていることも確かである。今の高校生は教師たちの高校時代に比べ、通っている学校に誇りを持てず、クラブ活動や異性とのつきあいに学校生活の樂

しみを求める、学校の規則に反発を感じようになっている。

ただし、「大学進学をめざして熱心に勉強する」と「家で毎日予習・復習をする」という、受験と勉強に関する2項目については、教師たちの高校時代以上に熱心な高校生がいることにも注意せねばならない。それは共通一次受験者の多い進学校に顕著な傾向で、非進学校においては、その率はきわめて低い。受験競争は、一部の生徒の間では昔以上に激化していることがうかがえる。

### 3. 教師は生徒をどう見ているか

#### (1) 状況の規定としての生徒観

社会学に「状況の規定」とか「予言の自己成就」という言葉がある。客觀が主觀を規定するというより、主觀が客觀をつくり出す現象を説明するのに有効な概念である。

たとえば「ある銀行がつぶれる」という客觀状勢がないのに、そういうデマがとんだとする。すると人びとは「銀行が危ない」という「状況の規定」をつくって、とりつけ騒ぎを起こし、本当に銀行がつぶれてしまうという結果を生み出す場合がある。

また、高名な心理学者がランダムに選んだ生徒を「優秀である」と学校の教師に示唆しておくと、教師はその生徒が優秀であると思いつむ。状況の規定がつくられる。その先入観で生徒に接するため、実際に生徒の成績がきわだって上昇してしまう場合がある。心理学でいうピグマリオン効果である。

このような予言の自己成就ともいべきメカニズムが、現代の高校の教育現場にも働いていることが充分考えられる。

教師たちは、今自分が教えている高校生たちがどのような生徒であると「状況の規定」をしているのであろうか。状況の規定としての教師の生徒観は、どのような教育効果を生んでいるのであろうか。

#### (2) 生徒観の構造

教師たちの生徒観を知るために、次のような質問をした。「あなたの学校には“次のような生徒”はどの程度いると思いますか。」として、「家で毎日予習・復習をする」から、「人の気持ちを察することができる」まで、勉強・成績、クラブ活動、友人、異性交友、非行、テレビ、性格など20項目について尋ねた。回答は、1「とても多い」、2「かなり

いる」、3「少しいる」、4「ほとんどいない」の4段階で求めた。

その結果を因子分析にかけると、教師の生徒観が三つの因子から成ることがわかる（表III-3）。

第1因子は、大学進学をめざして熱心に勉強し、予習・復習もかかさず、特にできない科目もなく、通っている学校に誇りを持っているという評価で、「勉強熱心」と名づける。

第2因子は、学校・クラス・クラブに愛着を感じ、学校生活を楽しんでいるという評価で、「学校適応」と名づける。

第3因子は、高校生らしからぬ、非行、異性とのつきあい、学校への反抗、無気力傾向が顕著という評価で、「反抗・無気力」と名づける。

この第1因子と第2因子をクロスさせてプロットしたのが図III-4である。これによると、教師によって状況規定される生徒の特徴として、大きく三つのものがあることがわかる。

第1は、大学進学をめざして、ふだんの授業もまじめにきき、家での予習・復習もかかさない「勉強型」の高校生像である。

第2は、勉強よりは幅広い活動が特徴の積極派の高校生像で「のびのび型」といえる。

第3は、学校や勉強に不適応で、反抗・無気力、孤立が特徴となっている高校生像で、「逸脱型」と名づける。

これらの見方は、生徒自身の行動の意味づけとは違っていることも充分考えられる。しかし、どのような生徒として教師たちから思われているかという「状況の規定」がここでは重要である。

第3の「逸脱型」というのは、教師の価値基準から見ての逸脱である。生徒自身は必ずしも逸脱とは感じていないであろう。学校の

表III-3 教師の生徒観の構造（因子分析結果）

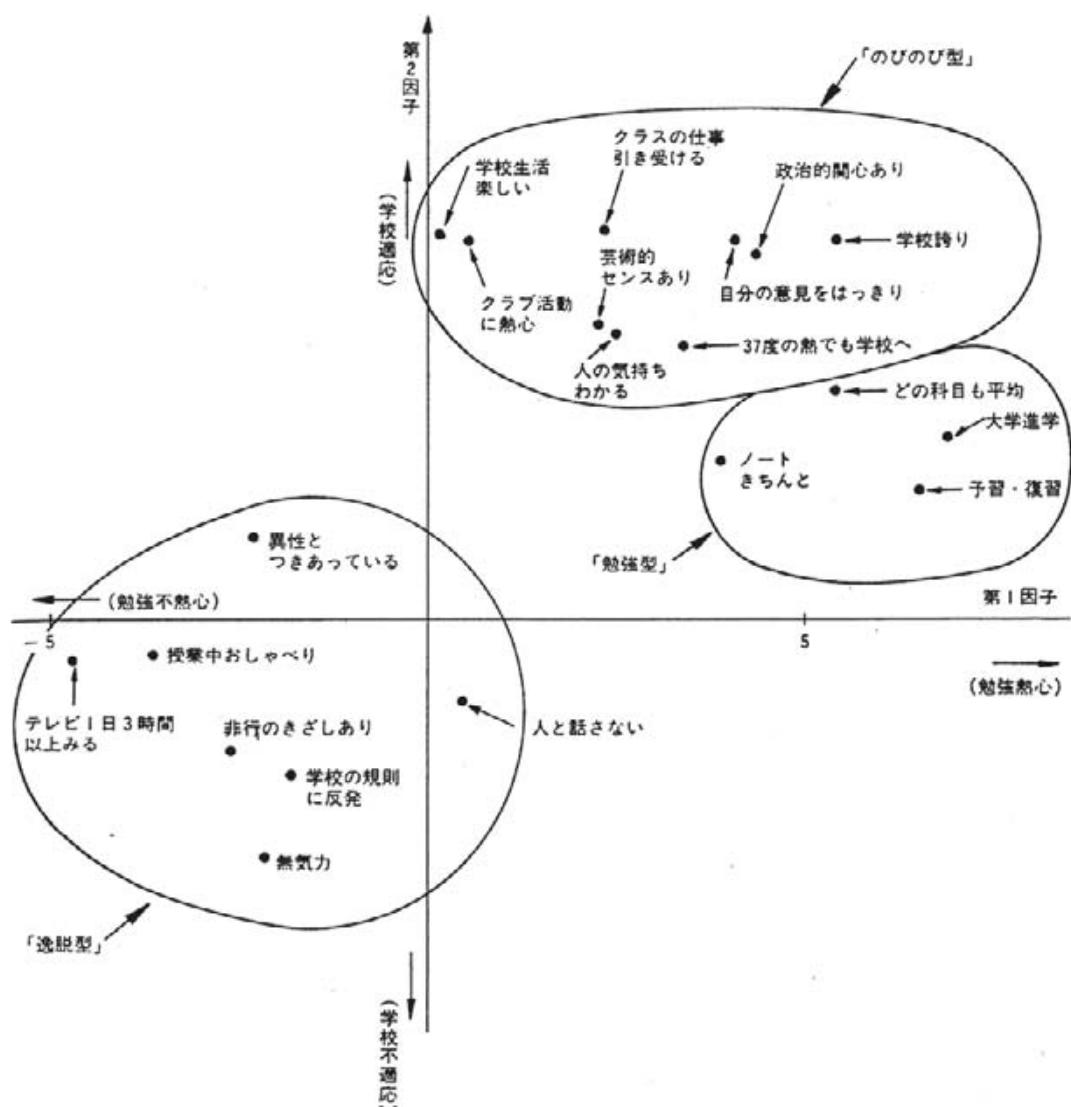
	第1因子 勉強熱心	第2因子 学校適応	第3因子 反抗・無気力
因子の名称			
因子を特徴づける変数	家で毎日、予習・復習をする (0.800) 大学進学をめざして熱心に勉強する (0.793) どの科目的点も平均している (0.534) この学校の生徒であることに誇りを感じる (0.528)	学校生活を楽しんでいる (0.517) クラスの仕事をすんで引き受ける (0.509) この学校の生徒であることに誇り (0.508) 自分の意見をはっきりもつて いる (0.503) クラブ・部活動に打ち込む (0.500)	非行のきざしがある (0.609) 授業中によくおしゃべりをする (0.541) 学校の規則に反発 (0.500) 異性とつきあっている (0.441) テレビを1日3時間以上みている (0.412)
因子寄与率	76.9%	13.8%	9.3%

注) ( ) 内は因子負荷量

規則への反発と、非行化傾向、無気力との三つが、教師たちによってはほぼ同じもの、同一視されているのは興味深い。生徒たちは、それぞれを別のものとして考えているかもしれない。教師たちの側には、生徒が勉強を中心とした学校生活に適応的であるか

否かという単一の基準で判断する傾向があると思われる。したがって、教師にとって勉強から逸脱した生徒は、反抗も非行も無気力も同一の問題行動をとるものとして映るのであろう。

図III-4 教師の生徒観の構造（因子分析結果）



### (3) 生徒観の全体的傾向

それぞれのタイプの生徒がどれくらいいると思われるかを全体で見たのが表III-4である。

まず「勉強型」について見ると、「ノートをきちんととる」生徒は86%（とても多い+かなりいるの割合）といちばん多く、次いで「どの科目の点も平均している」（49%）、

「大学進学をめざして熱心に勉強する」（47%）、「家で毎日子習・復習をする」（41%）となっている。勉強型の生徒は約半数近くいるというのが、今の高校教師の一般的認識となっている。

次に「のびのび型」について見ると、「学校生活を楽しんでいる」生徒（70%）や、「クラブ・部活動に打ち込む」生徒（59%）が圧倒的に多いとされている。「この学校の生徒

表III-4 教師はどういう生徒が多いと思っているか

(%)

生 涉 目	項 目	尺 度			
		とても多い	かなりいる	少 し い る	ほとん どい ない
勤 勉	家で毎日、予習・復習をする	8.0 40.9	32.9	47.0 59.1	12.1
	ノートをきちんととる	22.0 85.5	63.5	14.2 14.5	0.3
	大学進学をめざして勉強する	9.7 47.4	37.7	46.0 52.6	6.6
	どの科目の点も平均している	3.0 49.4	46.4	46.1 50.6	4.5
の の	この学校の生徒であることに誇り	9.5 47.8	38.3	39.6 52.2	12.6
の の	37度の熱があっても学校へ行く	0.7 21.0	20.3	57.7 79.0	21.3
ア ブ	政治的・社会的関心高い	0.2 8.0	7.8	55.6 92.0	36.4
の の	自分の意見をはっきりもつている	1.3 26.4	25.1	61.9 73.6	11.7
ア ブ	芸術的センスがある	0.4 12.0	11.6	70.8 88.0	17.2
の の	人の気持ちを察することができる	1.0 37.3	36.3	56.6 62.7	6.1
ア ブ	クラスの仕事をすすんで引きうける	0.7 18.0	17.3	65.3 82.0	16.7
の の	クラブ・部活動に打ち込む	5.3 58.6	53.3	40.5 41.4	0.9
ア ブ	学校生活を楽しんでいる	10.4 69.8	59.4	28.2 30.2	2.0
の の	異性とつきあっている	1.9 34.3	32.4	62.7 65.7	3.0
ア ブ	授業中よくおしゃべりをする	5.0 31.7	26.7	52.1 68.3	16.2
の の	非行のさじがある	0.6 9.9	9.3	65.3 90.1	24.8
ア ブ	学校の規則に反発を感じている	3.4 33.0	29.6	57.3 67.0	9.7
の の	学校でだれともあまり話さない	0.1 0.9	0.8	51.3 99.1	47.8
ア ブ	何事にも無気力である	2.2 25.2	23.0	60.0 74.8	14.8
の の	テレビを1日に3時間以上みている	6.2 50.0	43.8	41.5 50.0	8.5

であることに誇りを感じている」生徒（48%）も半数近くいると考えられている。次いで「人の気持ちを察することができる」（37%）、「自分の意見をはっきりもっている」（26%）もほどほどにはいると考えられている。少ないのは「37度の熱があっても学校へ行く」（21%）、「クラスの仕事をすすんで引き受ける」（18%）、「芸術的センスがある」（12%）といった意欲型・奉仕型・芸術型の生徒であると考えられている。

最後に「逸脱型」について見ると、「テレビを1日に3時間以上見ている」（50%）無気力派が5割と多い。次いで「異性とつきあっている」（34%）、「学校の規則に反発を感じている」（33%）、「授業中よくおしゃべりをする」（32%）、遊び派・反抗派が約3分の1いると考えられている。「何事にも無気力」な生徒も4人に1人（25%）はいる。「非行のきざしがある」生徒は約1割（10%）、まったく孤立している生徒は、わずかながら（1%）いる程度である。

以上、全体で見た高校教師の生徒観をまとめてみると、クラブ・部活動に打ち込み、高校生活を楽しんでいる生徒がいちばん多く、次いで大学進学をめざして勉強する生徒が多くいる。異性とつきあったり、学校に反発を感じたり、非行化のきざしのある逸脱型の生徒は若干ながらいる。ひとり孤立している生徒は少ないが、社会的関心や奉仕精神のある生徒も少ない。現在の高校には、自分の利益（勉強・入試）と興味（クラブ活動）を中心に、仲間うちの生活を楽しんでいる者が多いというのが、教師たちの評価である。

#### （4）学校ランク別に見た生徒観

このような教師の生徒観は、教師の属性によってどのように違ってくるのであろうか。

図III-3でもその一部を見たように、まずそれぞれの学校のランクによって、そこに入ってくる生徒の能力や資質が違うのか、教師の生徒観も大きく違ってくる。

表III-5は、学校格差を共通一次受験者の

割合によって5段階に分け、それぞれのランクの学校の教師が、自分の学校の生徒をどう評価しているかを見たものである。

これを見ると、「勉強型」の高校生は学校格差の上位の学校ほど多く、逆に「逸脱型」の生徒は学校格差の下位の学校に多いと状況規定されている。「のびのび型」の高校生も、「勉強型」ほどではないにしても、学校ランクの上位の高校ほど多いとされている。

上の数字からは大きく四つの点が明らかになっている。第1は、学校格差の問題の深刻さである。下位ランクの高校の教師たちが、勉学意欲が低く、無気力で、反抗的で、時には非行のきざしもある生徒を相手に、日夜奮闘している姿が浮かんでくる。第2に、下位ランクの生徒たちは、クラブ・部活動に打ち込むこと、ノートをきちんととること、異性とつきあうことという3点を通して、からうじて学校生活へつなぎとめられている様子がうかがえる。第3に、進学校には、勉強面でも性格面でも優秀な生徒が集められ、教師たちは、勉強熱心で素直なエリート候補の高校生を相手に、比較的ゆったりと余裕を持った教育指導を展開している様子がわかる。教師たちが上位ランクの学校へ転勤したがる理由が、この数字を見れば納得できる。しかし、これは下位ランクの学校の犠牲の上に成り立っていることを厳しく認識しなければならない。第4に、このような学校ランクに規定された教師の生徒観は、生徒の実態に基づいているにしても、教師の主觀的状況規定は一人歩きして、予言を自己成就する場合もある。下位ランクの学校の生徒を、勉強嫌い・無気力・非行的と決めつけることは、彼らの中にある勉強意欲や達成意欲、さらには人間的やさしさの芽を摘み取ることにならないかと恐れる。

表III-5 教師の生徒観×学校ランク

(%)

項 目 生徒	度	低 い ← ランク → 高 い				
		共 通 一 次 受 試 者 の 割 合				
		2割以下	3割くらい	半数くらい	7割くらい	9割以上
家で毎日、予習・復習をする		▲14.0 < 39.1 < 64.9 < 79.6				(96.3)
ノートをきちんととる		▲78.2 < 87.3 < 94.1			92.8	(96.3)
大学進学をめざして勉強する		▲18.4 < 51.4 < 72.2 < 86.4	<	97.8		
どの科目の点も平均している		▲32.9 < 41.7 < 68.6 < 75.1	<	90.2		
この学校の生徒であることに誇り		▲24.4 < 47.0 < 68.6	<	82.3	<	(91.0)
37度の熱があっても学校へ		▲13.9 < 19.8 < 20.5	<	33.7	<	(43.5)
政治的・社会的関心高い		▲ 2.2 < 5.1 < 10.5	<	16.1	<	(33.1)
自分の意見はっきりもつてている		▲12.7 < 22.6		37.6 < 47.0	<	(53.1)
芸術的センスがある		▲ 7.6 < 13.9 < 14.1	<	14.7	<	(24.9)
人の気持ちを察することができる		▲27.9 < 36.1 < 46.5	<	50.9	<	(57.5)
クラスの仕事をちゃんとこなす		▲13.8 < 16.5 < 18.2	<	26.8	<	(29.9)
家庭活動に打ち込んでる		▲53.9 < 60.9		60.9	<	(71.6)
おしゃべりが上手		▲69.1 < 71.5 < 74.0	<	76.0	<	(79.5)
おしゃべりが下手		(43.2) > 32.6	>	24.2	>	21.4
おしゃべりがやや下手		(47.4) > 27.5	>	16.8	>	▲11.2
おしゃべりがひどく下手		(18.1) > 5.9		1.8	>	▲1.5
おしゃべりが上手		(47.1) > 28.5	>	18.2	>	▲15.0
おしゃべりがやや上手		0.9		0.9	>	0.7
人に話しかかれない		(37.4) > 20.2	>	16.0	>	▲9.0
テレビを一日3時間以上みている		(69.9) > 47.4	>	34.1	>	22.5

(数字はとても多いとかなりいるの割合、○は最高値、▲印は最低値)

### (5)教師の年齢別に見た生徒観

次に教師の年齢によって、生徒観がどのように違っているかを見よう。

先に見たように年齢の高い教師ほどランクの高い学校に勤めるようになるというキャリアパターンがあるので、単純に教師の年齢と

生徒観をクロスしたのでは、学校ランクの影響が数字にあらわれてしまう。そこで共通一次受験者の割合が2割以下の非進学校の教師(826名)だけを取り出し、生徒観の年齢差をみたのが表III-6である。

これをみると、年齢の高い教師ほど今の生徒たちが「勉強型」や「のびのび型」が多く

表III-6 教師の生徒観×年齢 (非進学校の教師のみ)

項目	教師の年齢	30歳以下	31~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50歳以上	(%)
家で毎日、子育・復習をする		9.5	7.7 <	12.8 <	15.6 <	16.8 <	23.1	
ノートをきちんととる		80.5	82.3 >	76.0	75.8	75.9	77.3	
大学進学をめざして勉強する		8.5 <	13.9 <	15.2 <	21.9 <	26.0 <	29.5	
この教科の点も平均している		30.7	30.0	29.8 <	35.2 <	36.5	36.3	
この学校の生徒であることは誇り		18.4	12.3	21.0 <	29.6 <	31.8 <	35.8	
成績の悪がちでいる学生		12.6	8.5	15.3 <	20.5 >	9.3	17.0	
成績第一の生徒が少ない		1.1	1.5	1.6	1.6	1.9 <	5.4	
自分の意見を出しても喜んでくれる		6.3	3.1 <	10.6 <	15.0	15.7 <	27.1	
苦悶的セッションがある		6.3	2.3	5.7	10.9	6.5 <	13.6	
人の気持ちを察することができる		20.1	24.6	29.6	32.8	26.0 <	36.7	
クラスの中でも上位にいる		8.5	8.5	14.4	14.2 <	22.3	18.4	
クラスの中でも下位にいる		42.3 <	51.5	52.5	51.2	58.4 <	71.0	
生徒の個性を尊重する		57.2	56.1	60.8	70.4	63.5 <	77.7	
生徒の個性を活かす		47.9	49.6	46.4	45.7 >	35.2	32.5	
生徒の個性を活かさない		62.1 >	52.3	52.8 >	35.4 >	30.6 >	25.0	
生徒の個性を活かさない		19.5	24.6	24.0 >	17.3 >	13.0 >	10.2	
生徒の個性を活かさない		62.1	52.0	55.7 >	44.1 >	30.6	30.5	
生徒の個性を活かさない		0.0	0.8	1.6	1.6	0.0	2.1	
生徒の個性を活かさない		43.1	41.5	45.9 >	35.2 >	30.6 >	25.0	
生徒の個性を活かさない		82.6 >	74.4 >	71.2 >	66.4	60.7	58.2	

注) 「とても多い」 + 「かなりいる」割合  
○=最高値

学校へも適応的であると評価している。例えば、同じ非進学校でも、「大学をめざして熱心に勉強する生徒がいる」(とても+かなり)と判定する教師の割合は、年齢の若い方より9%→14%→15%→22%→26%→30%と、40歳以上の教師に多くなっている。逆に、20代・30代の若い教師は、生徒が「授業中よくおしゃべりをする」は(5割以上、40代以上では3割台)、「何事にも無気力(4割以上、40代以上では3割台)、「学校の規則に反発する」(5割以上、45歳以上は3割)、「非行化のきざしがある」と否定的に評価しがちである。

それだけ、若い教師と生徒との間には葛藤が存在するといえよう。若い教師は生徒と年齢が近いから生徒の行動を理解し、あつれきも少ないと最初予想していたが、その予想は完全にはずれた。若い教師は高校時代に勉強以外の活動を上の世代より多少やっていたに

しても優等生であり、普通科高校以外の経験がなく、生徒はまじめに勉強するものという単一の基準によって判断し、その基準に合わない生徒と葛藤をおこしているのであろう。40歳以上のベテラン教師は、普通科高校以外の経験も豊富で、多少の諂ひはあるにしろ、生徒を余裕を持って、複眼的に見、柔軟な対応をしている。若い教師はベテラン教師の生徒観に学ぶべき点が多くあるように思われる。

その他の教師の属性(性別・教科別・担任の有無別・クラブの顧問別・役職別など)による生徒観の違いについては、大きな差がなかったので、考察を省略する。

いずれにしろ、教師が生徒をどう見るかということは、状況の規定=予言の自己成就のメカニズムによって、知らず知らずのうちに大きな教育効果を生むので、教師たちは偏見を捨て、虚心に生徒を見つめなければならぬ。